北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

タルシウス
TARSIUS

第6号

ゴロンタロの英雄　ナニ・ワルタボネの記念像

1999年7月発行

北スラウェシ日本人会会報《タルシウス　第６号》

目　　次

◇ ゴロンタロ観光案内　川井　雄二 2

◇ グローバルな視点から、インドネシアの母子保健を考える
インドネシア
母と子の健康手帳プロジェクト　芝山江美子 9

◇ はじめまして　野田奈緒子 13

◇ インドネシアー
トモホン町に別荘を作って見て　川口　博康 15

◇ ビトンでの鰹節製造の歴史について(2)
戦後の鰹節工場について　川口　博康 20

◇ インドネシアのまぐろ延縄漁業(2)　長崎　節夫 28

◇ 大岩勇と鰹節に見る南洋史の断片　藤林　　泰 33

◇ 「レフォルマシ」の陰で　松井　和久 35

◇ アンボンからの避難民　松井　和久 37

◇ 0, Ina ni Keke　ちょっとお嬢さん
ーマナドで唄ってー　庵　　波人 39

◇ インガ... インガ...　川井　雄二 50

◇ 編集後記　日本人会編集部 51

ゴロンタロ観光案内

川井　雄二

ゴロンタロは、行政的には、ゴロンタロ県（県庁所在地リンボト）とゴロンタロ市の２つの組織（地域）に分けられる。民族的にはゴロンタロ族であり、ミナンカバウ族と同様に、イスラーム色が強く、ゴロンタロ人＝ムスリムといっても過言ではないだろう。
スラウェシにおけるイスラーム化は、ゴロンタロが最も早く、1525年である。次いでブトンの1542年。南スラウェシがイスラーム化したのは17世紀初頭である。

戦前より『メナドは港、ゴロンタロは五郎太郎』と言われるが、これは全くの俗説である。北スラウェシ州の主要４民族を、通常『ボフサミ－ＢＯＨＵＳＡＭＩ』と呼ぶが、これは、①Bolaang Mongodow、②Hulontalo 、③Sangihe Talaud、④Minahasa　の略である。
これからも判るように、ゴロンタロは本来フロンタロであり、それは「放浪する」という意味の『Hulontalangi』から派生した語である。

ゴロンタロ県には、有名な《ドゥモガ・ボネ国立公園》を始めとして、クゥワンダンの《オレンジ要塞》、《リンボト湖》、《ロンボンゴ温泉》などいろいろな観光名所があるが、この稿ではゴロンタロ市を中心とした観光案内としたい。

ゴロンタロ市

ゴロンタロ市は、1999年３月19日に生誕２７１周年を迎えた。
マナド人が自分たちの同胞を『カワヌア／Kawanua 』と呼ぶように、ゴロンタロ人は自分たちの同胞に対し『カラワン／Karawang』と呼ぶ。
マナドがサム・ラトウランギの街であるとすれば、ゴロンタロはナニ・ワルタボネ（後述）の街である。空港名こそジャラルディンであるが、これは、ナニ・ワルタボネが1986年まで在命していたからであろうと思われる。

ゴロンタロは動物の街である。馬や山羊が放し飼いになっており、我が物顔で街を闊歩している。市の中心部の入口には《Kawasan Bebas Hewan Lepas 》（動物放し飼い禁止区域）の看板が出ており、ここから先は動物を繋いでおかなければならない。
市民の足となっているのが『ベンディー／Bendi 』と呼ばれる乗り合い馬車である。要所毎に馬用の餌である干草を販売している店がある。
他に小型バスやベチャもある。市内は平地でほとんど坂道がないので、ベチャ屋にとっては楽であろう。

ゴロンタロは秩序正しい街である。街中の全ての塀や柵が、緑と白のツートン・カラーで統一されており、美しい景観となっている。これは教会や仏教寺院も例外ではない。
ゴロンタロの一日は、朝の礼拝《Subuh 》から始まる。大小のマスジッド（モスク）から流れてくるアザーンは街のどこにいても聞こえる。イスラーム圏にいることが実感される時である。朝の礼拝の後、市民の最初の仕事は、家の前の道路にある馬糞を片付ける事である。

クリスチャンの街マナドとムスリム／ムスリマーの街ゴロンタロはいろいろな面で対称的である。その一つに人々の服装がある。ゴロンタロでは、ノースリーブやミニスカート姿の女性を見かけることは滅多にない。女性の多くはジルバブで頭髪を被っている。
また、ビールなどを販売しているレストランでは、入口にカーテンやついたてを置き、外から中が見えないようにしてある。ラマダーン月には、日中全てのレストランが完全に閉まるという。以前は、バーやカラオケなども数軒有ったが、住民の反対運動にあったり、客数が少なく経営困難に陥ったりして、現在では全て閉鎖状態となっている。僅かにビリヤード店が数軒営業している程度で、夜の娯楽の少ない健全な街である。

ナニ・ワルタボネ　(NANI WARTABONE)

1907年４月30日、Boludawa Suwawa 村で生まれる。家族はゴロンタロの貴族階級出身。

ゴロンタロのＨＩＳ（オランダ式原住民小学校）を卒業後、スラバヤのＭＵＬＯ（初等中学校）で学ぶ。その後一時トンダノのＭＵＬＯに移籍するが、再びスラバヤのＭＵＬＯに戻り、1928年に卒業する。

スラバヤ時代はスカルノらと親交を結び、1928年ゴロンタロに戻るとＰＮＩ（インドネシア国民党）ゴロンタロ支部を結成するため活動したが、スカルノが逮捕され、支部結成前にＰＮＩは解散した。

1931年にはPartindo（インドネシア党）ゴロンタロ支部を結成し、支部長に就任した。同党が禁止されると、ムハマディヤ社会運動組織で活躍するようになる。

こうして彼の名は、ゴロンタロの津々浦々まで知れ渡る事となり、『1942年１月23日事件』を指導することに繋がる。

1986年１月３日（金）11:30 、故郷ゴロンタロで死去した。

１９４２年1月２３日事件　(Peristiwa Merah Putih 23 Januari 1942 di Gorontalo)

1942年（昭和17年）１月、日本軍のミナハサ占領のニュースは直ぐゴロンタロまで広まった。僅かな戦力で日本軍に抗戦する無意味を悟ったオランダ軍の W.C.Romer隊長は、軍事施設のみならず一般主要建物を焼き払い、ゴロンタロを焦土と化し、中部スラウェシに遁走する計画を立案した。その計画を事前に入手したナニ・ワルタボネは、オランダ軍に対抗しゴロンタロを死守することを決意した。

1942年１月23日未明、ナニ・ワルタボネに指導された、スワワ村、カビラ村、テルナテ村、ブギス村などの近隣の民衆は、続々と市街に向かい、その列は10キロに達した。集結した民衆は、午前５時には既に街の主要建物の周りを囲み終えていた。ナニ・ワルタボネはオランダ軍に対し最後通牒を下した。事が既に決したことを知ったオランダ軍１５名は武器を捨て、民衆の前に降伏した。こうしてゴロンタロは、ナニ・ワルタボネが望んだ通り、一滴の血も流すことなく、インドネシア民衆に解放されたのである。

1942年１月23日（イスラーム暦1361年ムハッラム月６日）午前10時。ナニ・ワルタボネは、同志 Kusno Danupoyo の横で記念すべき宣言を行なった。

『本日、1942年１月23日、我々インドネシア民族は、この地（ゴロンタロ）において独立を為し遂げた。いかなる支配からも自由になった。我々の旗は紅白旗。我々の民族歌はインドネシア・ラヤ。我々の言語はインドネシア語である。』

1945年８月17日に先駆け、ゴロンタロでは既に独立宣言が行なわれていたのである。その後ゴロンタロにも日本軍による軍政が敷かれ、1942年６月６日、紅白旗は禁止され日章旗だけが翻るようになった。しかし、この1942年１月23日事件の精神は、ゴロンタロ人の誇りとして、現在も脈々と受け継がれている。

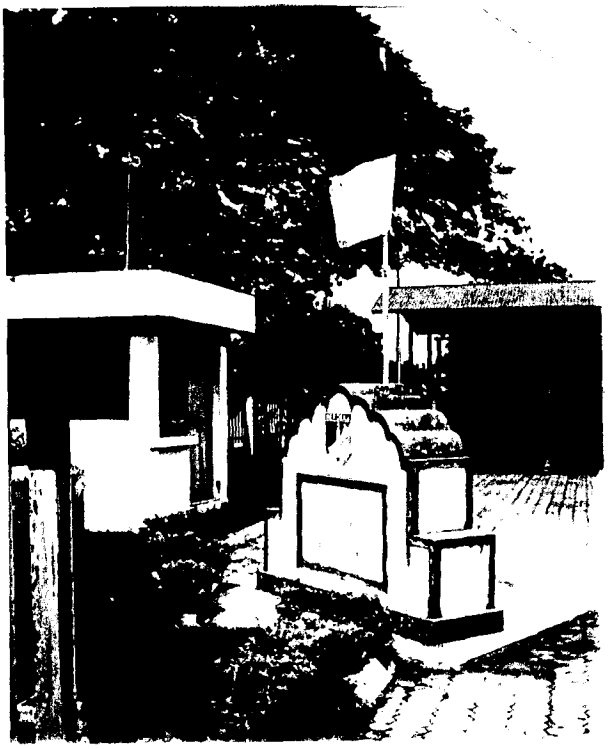
ゴロンタロ中央郵便局

Jl. A. Yani No.16 Gorontalo

1942年1月23日、歴史的な独立宣言が行なわれた地。

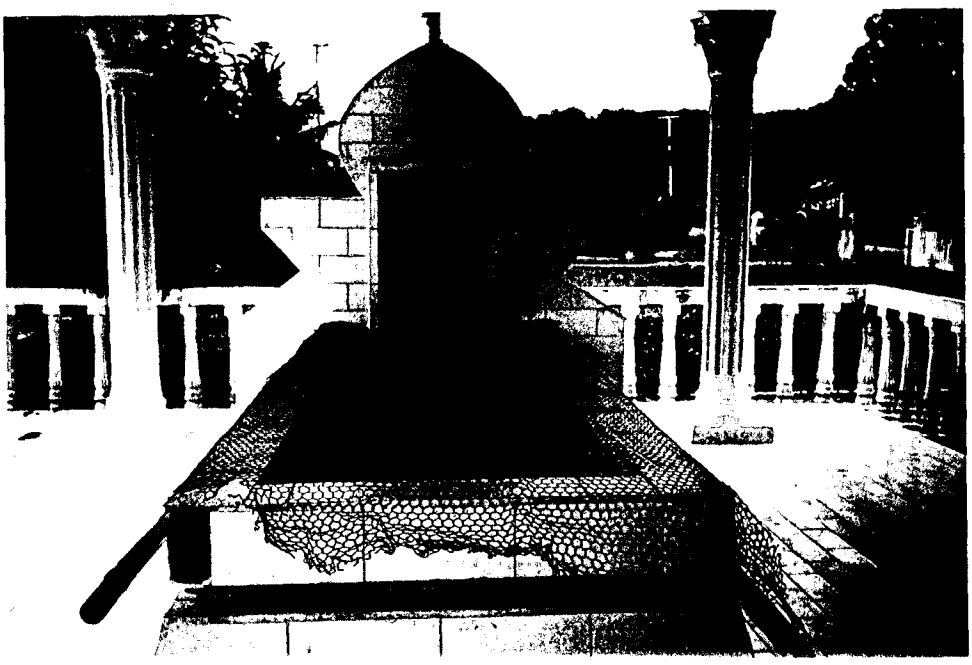
"Pada hari ini tanggal 23 Januari 1942 kita bangsa Indonesia yang berada di sini, sudah merdeka bebas, lepas dari penjajahan bangsa manapun juga.
Bendera kita yaitu Merah-Putih, lagu kebangsaan kita adalah Indonesia Raya. Pemerintah Belanda sudah diambil alih Pemerintah Nasional."

ナニ･ワルタボネ 記念像



前頁の中央郵便局敷地内にある記念碑

1987年8月17日、C.J. RANTUNG州知事によって公認化された。



ナニ･ワルタボネの墓
その横には夫人の墓がある。

夫: NANI WARTABONE
1907年4月30日生まれ。
1986年1月3日没。

妻: AISA WARTABONE TANGAHU
1910年10月6日生まれ。
1977年11月22日没。

オタナハ要塞 (BENTENG OTANAHA)

《オタナハ要塞》群は、1978年～1981年に修復され、1981年２月10日、Prof. DR. Haryati Soebadio教育文化局長により公認化された。1992年には、文化保護材として指定された。(UU No. 5 THN 1992 Tentang Cagar Budaya)　市街の西方にあるデンベ村に位置する。

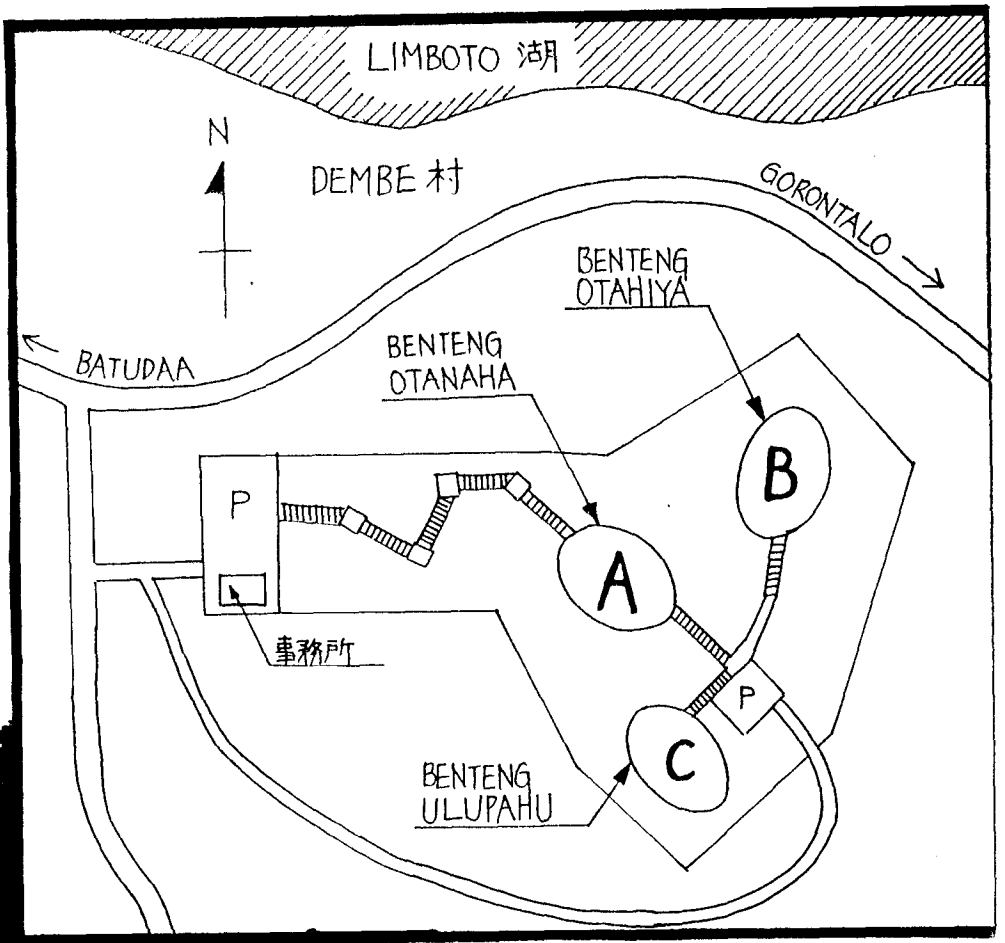
要塞群は、建造年代が異なる３つの要塞、『オタナハ(OTANAHA)』『オタヒヤ(OTAHIYA)』『ウルパフ(ULUPAHU)』から成り、それぞれが石段で連絡されている。

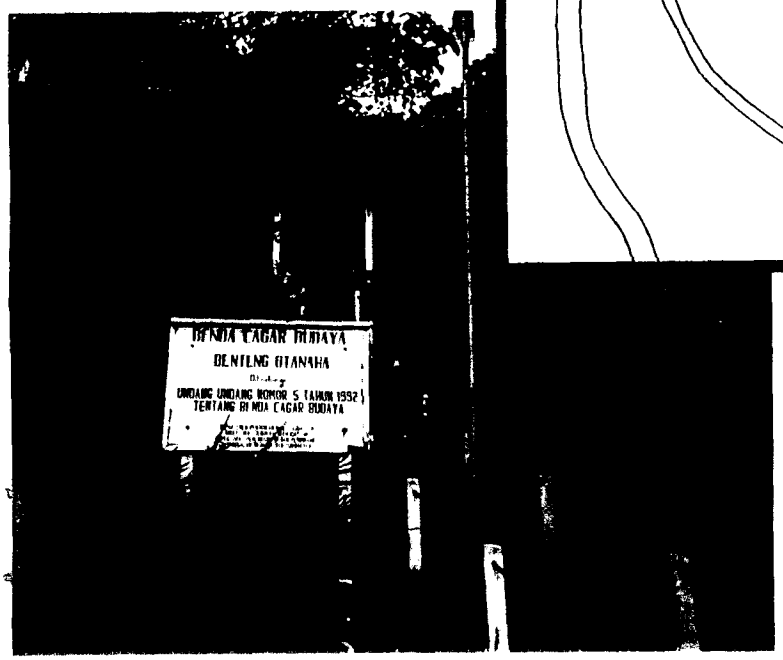
要塞は、積み上げた石を、砂と石灰をマレオの卵で練ったもので固めて造られたという。

最初のオタナハ要塞に行くには、３００段弱の、長い険しい石段を登らなければならない。途中で４ヵ所の休憩所があるので休みながら登ることができる。人が息を切らせ苦しんでいる脇で、山羊たちが、ヒョイヒョイ楽しそうに走り廻っているのを見るのは癪である。石段には白ペンキで段数が書かれているので、苦心して数える必要がない。

オタナハ要塞がある頂上まで登ると、かなりの標高になる。ここから眺めるリンボト湖の風景は素晴らしく、一大パノラマである。

オタナハ要塞見取図





Nomor : 01141

DINAS PARIWISATA
KODYA DATI II GORONTALO

Segi Pengawasan

KARCIS TANDA MASUK
OBYEK WISATA
BENTENG OTANAHA

(Sesuai Perda No : 8/1992)

Dewasa Rp. 500,- / Orang

Asuransi Jasa Raharja Putera Rp. 50

この要塞の基は、1525年頃、ポルトガル軍に対抗するために、イラト王（Ilato / Mato Lodulakiki）（1505-1585）が建てたものである。しかし、イラト王は、ポルトガル軍の攻撃に耐えきれずに要塞を捨て後方に撤退した。

イラト王とトランフラ王妃(Tolanghula)の間には、ンドバ(Ndoba) ティリアヤ(Tiliaya) ナハ(Naha)という３人の子がいたが、1585年ナハが要塞跡に戻り、同地に新しい要塞を建造した。これが、オタナハ要塞である。

ナハと妻オヒヒア(Ohihia)の間には、パハ(Paha)とリモヌ(Limonu)の２人の子がいたが、パハが建造した要塞が、ウルパフ要塞である。

《オタナハ要塞》　後方に見えるのは、リンボト湖である。

マスジッド・バイトゥッラヒム（MASJID BAITURRAHIM）

イスラーム国ゴロンタロを象徴する大モスクである。名前の『バイトゥッラヒム』とは、『慈悲あまねく家』という意味である。

1728年に建造され、1979～1982年に修復された。現在は拡張工事中。1999年８月完成予定であったが、経済危機のため工事が遅れている。

市街の中央、バスキ・ラフマット通りに位置する。ゴロンタロ市民が誇りとするこのモスクの壮麗さは、アチェやメダンの大モスクにも引けをとらない。特に夜間、緑色に輝くミナレット（塔）の美しさは格別である。この塔を見るだけでもゴロンタロに行く価値がある。

鰐園《マナ・スカ》（TAMAN WISATA BUAYA "MANA SUKA"）

実業家 Ramli M. Abadita 氏(50)が設立した民間の小動物園。1999年２月21日、ゴロンタロ県知事（代理人 Abdullah Talani氏）によってオープンされた。

市街から東に12キロ、ゴロンタロ県カビラ(Kabila)郡ロヌオ(Lonuo) 村に位置する。

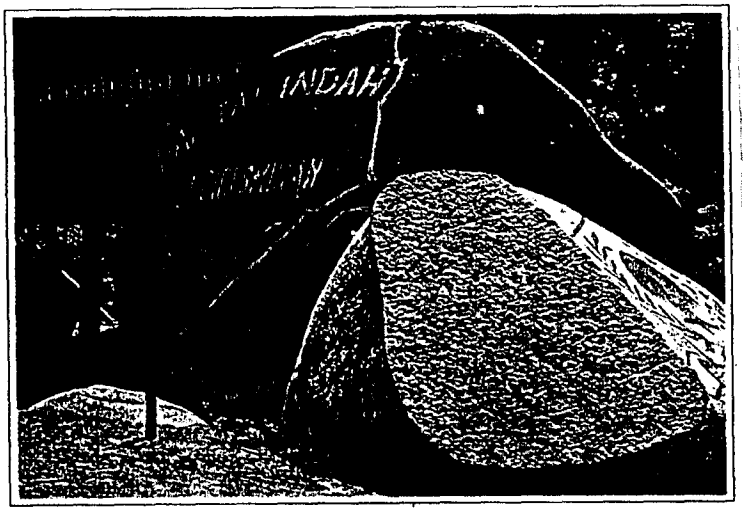
主な動物：ワニ。アノア。クスクス。緑蛇（猛毒性）。大蛇。ソワソワ（大蜥蜴の一種）。猿。兎。

敷地は１ヘクタールあり、今後段階的に施設を拡大していく予定である。

パンタイ・インダ（PANTAI INDAH）

ゴロンタロ市街から南西僅か２キロのポヘ(Pohe)村に、パンタイ・インダ（美しい海岸）と呼ばれる海岸がある。ゴロンタロ市民の憩いの地になっており、休日には家族連れの観光客で賑わう。釣やボート遊びが楽しめる。

海岸沿いには、《巨人の足跡》と呼ばれる大石がある。
大石が鋭利な刃物で切断されたように平らに削られており、それが足跡のように見える。
伝説によると、巨人、『ラヒロテ（Lahilote）』が天空から地上に降りる時、片足をこの地に下ろしたのだという。もう一方の足はボネ(Bone)海岸に下ろしたという。



A Giant footprint on a stone

《巨人の足跡》と呼ばれる大石

パンタイ・インダは、崖にある巨石群の奇観で有名

トンビロ・トへの夜　（Malam Tombilo Tohe）

毎年、ラマダーン月２７日夜、ゴロンタロの景色は一変する。
灯油を入れた陶器やブリキ缶の即製のランプが、家の庭、道路、田畑などあらゆる空地に置かれ、何万、何十万という灯火が街中を煌々と照らすのだ。
これが、『トンビロ・トへの夜』、別名『灯火の夜』である。
このゴロンタロの伝統的儀式はインドネシア国内でも有名で、毎年テレビで放映される。

『トンビロ・トへの夜』の儀式は、聖クルアーン（コーラン）、第97章《神戒（みいつ）章》の故事に基づく。
慈悲あまねく慈愛深きアッラーの名において。①本当にわれは、神戒の夜に、この（クルアーン）を下した。②神戒の夜が何であるかを、あなたに理解させるものは何か。③神戒の夜は千月よりも優る。④（その夜）天使たちと精霊は、主の許しのもとに、凡ての神命をもたらして下る。⑤暁の明けるまで、（それは）平安である。

神戒（カドル）は、偉力、神命、運命あるいは富、価値などの意。神戒の夜（ライラトル・カドル）とは預言者ムハンマドがマッカ郊外のヒラー山上の洞窟で、最初の啓示に接した夜をさすといわれる。それがラマーダン月の27日（また25日、23日、あるいはその他の）夜であるともいわれる。　【訳／注：日本ムスリム協会】

出稼ぎで地方へ出ていたゴロンタロ人が、レバランを迎えるため郷里に向かう時、彼らを暖かく出迎えるのが、この何万、何十万という灯火なのである。

チャップ・ゴ・メー （CAP GO MEH）

『十五夜』のことを福建語でチャップ・ゴ・メーと発音する。これは、旧正月の15日を意味する。旧暦正月は全ての中国人が祝うが、福建人はその次に15日の夜を大事にするという。旧正月15日に行なう儀式を『チャップ・ゴ・メー』といい、中国人のみならず、ゴロンタロ人も毎年楽しみにしている。故ナニ・ワルタボネ翁もチャップ・ゴ・メーを好んだという。

儀式は、礼拝の他、剣舞、獅子舞い（バロン・ダンス）、竜の舞い（ドラゴン・ダンス）楽団などのアトラクションがある。

ゴロンタロはイスラームの街だが、他の宗教に対して非常に寛大である。1999年３月３日、Boliohoto 郡 Sidomulyo村で Vihara Dharma Mulya仏教寺院が完成した。これは、1993年に２億ルピアの予算で計画されていたものが、経済危機の影響で総工費10億ルピアとなり、本年ようやく完成したものである。落成式には、E.E.Mangidaan 州知事が出席したが、落成式の実行委員として、地元ムスリムの指導者 Thamrin Mangindaan 氏やキリスト教やヒンドゥー教の指導者たちも名を連ねている。

前述の竜の舞いにおいても、中国人のみならず、プリブミのゴロンタロ人も参加している。ゴロンタロでは、『チャップ・ゴ・メー』は既に街の伝統行事の一つになっているのである。

ゴロンタロの銘菓： ピア （PIA）

ピアは、本来は中国の菓子で、福建語で『餅』という意味である。
しかし実際は餅というより饅頭である。

中身は、黒餡が普通だが、チーズなどの変わり種もある。

パイのような皮で包まれている。

円形で、直径５センチの小型のものから直径15センチの大型のものなど様々の大きさがある。

賞味期限は約１週間ほど。

マナドの土産店やスーパーでも販売している。右見本の『OHARA 』の他にも、『BAHAGIA 』『CENDERAWASIH』『RAMAYANA』など多数の銘柄がある。

ゴロンタロの名物料理： ミル・シラム （MILU SIRAM）

本来、ゴロンタロ語では、ビンテ(Binte) というが、『ミル・シラム』としての名の方が一般的になっている。【『テイヌトゥアン』(Tinutuan)が『ブブール・マナド』として全国的ブランドになった例と似ている。】ミル(Milu)とは、ミナハサ語で玉蜀黍の意味。

『ミル・シラム』とは、《玉蜀黍スープ》のことである。

中身は、碗の半分以上を占める玉蜀黍の他には、小魚（又は干小エビ）、椰子の実（白い果肉）、長ネギ等というシンプルなもの。ミー・バソなどのように軽食として食べられる。玉蜀黍はゴロンタロの主要産物で、国内だけでなく、マレーシアへも輸出している。

ミル・シラムはマナドでも味わうことができる。Jl.Sudirman のFuji Film の３軒隣の店。毎日午後６時から品切れになるまで営業。一杯２千ルピア。メニューはミル・シラムのみ。カンプン・アラブにもミル・シラムの専門店が数軒ある。

主要参考文献：
① MANADO POST （日刊マナド・ポスト）
② WARTA SULUT （週刊北スラウェシ・ニュース）
③ PESONA NYIUR MELAMBAI SEBUAH REFLEKSI
④ NORTH SULAWESI VISITOR'S GUIDE BOOK

日本人の皆様お元気ですか？マナドにきてから２か月になりました。これからもよろしくお願いいたします。インドネシア母と子の健康手帳プロジェクトを紹介させて、いただきます。

グローバルな視点から、インドネシアの母子保健を考える

インドネシア母と子の健康手帳プロジェクト
北スラベシ州事務所
（埼玉県健康福祉部健康福祉政策課　芝山江美子）

はじめに

わが国の乳児死亡率は、1950年には、60.1（出生1000人当たり）と高かったが、1996年には3.8と世界最高水準に達している。しかし世界を見渡すと、現在でも開発途上国では、乳児死亡率が５０以上の国が６０か国以上もあるといわれている。開発途上国の側からは、第２次世界大戦後の急激な乳幼児死亡の減少を経験したわが国の母子保健に学びたいという非常に強い期待が寄せられているが、開発途上国では、文化、宗教、経済状況、交通手段、教育レベル、移住環境などの保健医療を取り巻く環境がわが国と大きく異なり、医師などの保健医療従事者の不足、医療施設や器具の貧弱さなど保健医療面での種々の問題を抱えており、日本の経験がそのまま現地で応用できるわけではない。日本では、戦後の母子健康手帳が始まったのは、ちょうど５０年前である。現在では、世界的に日本の母子手帳が注目を集めている。

インドネシアにおける母子保健の現状は、出産については、自宅で伝統的出産介助人によって行われる例が５０%以上で、妊婦の死亡原因は、分娩時の出血・感染症・子癇発作の順に多い。また、ハイリスク妊婦が病院に搬送される途中で死亡してしまうケースがかなり多い。機能の整った病院への搬送体制にまだ問題がある。また、子供の死亡の直接原因の７０%以上は感染症によるものであるが、その背景には子供自身の栄養失調、親の教育不足、劣悪な衛生環境が大きな要因になっている。そして、これらの諸要因はまさに貧困と深く結びついている。開発途上国では、貧困、急激な人口増加、農村や都市の環境の悪化が相互に作用し、これらの社会経済的要因が、子供の死亡と大きくかかわっている。

母と子の健康手帳プロジェクトの発足と経緯

この母子健康手帳普及活動は、中部ジャワで実施された家族計画母子健康手帳プロジェクトがはじまりである。１９９３年、１人のインドネシア医師が日本での研修で、母子健康手帳活動を視察した。彼は、非常に興味を持ち、日本の母子健康手帳が妊娠時から５歳までの間、母親達の教育や母子保健状況の改善に大きな役割を果たしているため、インドネシアにもこの活動を紹介したいと考えた。初めは、人口約１５万人のサラティガ市で、試行し、非常に良い成果を得た。その後、保健所スタッフや保健ボランティアへの多大なインパクトや比較的学歴の低い母親に対する教育効果などが明らかになるにつれ、世界銀行やユニセフの関心も高まり、活動地域は急速に広がり、１９９７年には中部ジャワ州の約

１８００万人をカバーするまでになった。現在では、多くの州がこの活動に興味を持ち、自力で普及活動を展開しようとしている。その後毎年、幾つかの県に普及活動を広げて行き、４年後には、全州に拡大することができた。既にブンクル州・南スラベシ州・東ジャワ州が幾つかの県と保健所を選び、活動を始めている。１９９８年にＪＩＣＡと保健省が新しいプロジェクトを西スマトラ州と北スラベシ州で開始した。

北スラベシ州の母子保健

ワークショップに基づく最終的なプロジェクトの要約

プロジェクト名	母と子の健康手帳プロジェクト
ターゲット地域	北スラベシ州
プロジェクト期間	１９９９年４月～２００３年９月
ターゲットグループ	母親と子供
上位目標	北スラベシ州の母子保健状態が向上する
プロジェクト目標	質のよい保健サービスの恩恵の下で、母親が自分自身と子供のために健康な生活を営む
成果	１．母子保健に関する母親の知識が向上する ２．保健サービス提供者の技術が向上する ３．レファラルシステムが望ましい状態まで向上する ４．各段階でプロジェクト活動がモニター及び評価される
Intervention Studies 計画	実施時期：４月１０日～２２日基礎調査実施済み 基礎調査　母子健康手帳プログラム導入時 評価調査　母子健康手帳プログラム導入後３年目 実施内容：住民の母子保健に関する知識・態度 保健ボランティアの母子保健に関する知識・態度 保健スタッフの母子保健に関する知識・態度
Provincial Coordinating Committee	Chairperson：保健省州出張所長 Vice Chairperson:州衛生局長 Secretary：家族保健課長（州衛生局）・計画課長（州衛生局）・疾病対策/健康課長（保健省州出張所）・公立病院長・パイロット県衛生部長 オブザーバー：医師会州支部長・婦人会州支部長・助産婦協会州支部長・各種援助団体フィールド事務所長
母子保健サービスへのアクセス率	プログラム対象県：(人口：) 平成１１年度（１９９９年) Bolmong 県・ Manado 市 コントロール県：(人口：) 平成１３年度（２００１年) Minahasa 県・ Bitung 市 （留意点） １コントロール県とプログラム対象県は社会・属性的にプログラム対象県と類似していること ２コントロール県は、母子健康手帳プログラムの展開において最終年度にあたる３年目のプログラム実施となることを州担当者に承認してもらう必要がある。

	人口 (SUPAS:1995)	妊婦数 (1998)	Puskesmas (1998)	Posyanndu
Golontalo 県	631,002	17,487	33	807
Bolmong 県	403,800	10,868	26	385
Minahasa 県	71,1825	18,339	40	1,255
Satal 県	266,474	5,750	20	458
Galontalo 市	128,890	2,911	6	127
Manado 市	375,087	9,092	10	259
Bitung 市	107,991	3,155	5	130
合計	2,625,069	67,602	140	3,421

今回スラベシ島（**北スラベシ州**・中部スラベシ州・東南スラベシ州・南スラベシ州）のうち対象州である北スラベシ州の初年度プロジェクトサイト県の Manado 市は、人口約３１万人、北スラベシ州の州衛生局（Dinas）や保健省州出張所（Kanwil）が所在する。また、ボラアン・モンゴンドウ（Bolaang Mongondow）県では、人口約４１万人、面積 8,000km で、Manado 市から県都のコタマバグ（Kotamobabu）まで、車で３時間から３時間半のところに位置する。県内には、２６の保健所（うち１１が有床）があり、２６１の村に対して２４１人の地域助産婦（Bidan di Desa）がいる。

また、ミナハサ（Minahasa）県では、人口約７１万人、Manado 市を囲むように隣接している。県内には４０の保健所があり、４９８の村に対して３６８人の地域助産婦（Bidan di Desa）がいる。妊婦は、地域の健診活動（Posyandu）1,255 数と地域助産所（Polindes）で妊婦検診（ANC）を受け、地域助産婦との交流はあるが、出産は、病院など施設でと考えている。県は都市的環境と農村的環境が複雑に混在しているようで、県内地域格差は大きいという印象を受けた。

北スラベシ州の今後の母子保健

１９９９年４月９日に事務所を立ち上げて、早１か月は過ぎた。現在、私を含めて３人の専門家が働いている。２００３年まで、母子健康手帳の配布や、医療従事者、地域保健ボランティア母親の教育研修等をおこなう。重要なことは、活動の自主性と継続性で、母子健康手帳の配布だけではなく、研修・モニタリング・活動評価も一諸に実施する。

現在インドネシア現状は、政治、経済が非常に不安定で、母子保健状況の悪化、子供の栄養失調、家庭の収入の減少で医療機関へのアクセスの低下などが問題になっている。

私達は、母子健康手帳を通じて母子保健状況が改善されるまで、技術支援を続け、インドネシアの自立に貢献したいと思っている。

インドネシア 母と子の健康手帳

362.198.2
Ind
b

BUKU KESEHATAN IBU DAN ANAK

Propinsi Sulawesi Utara

Bawalah Buku ini!
setiap pergi ke tempat pelayanan kesehatan

DEPARTEMEN KESEHATAN RI
bekerja sama dengan

JICA JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY
THE ENSURING QUALITY OF MCH SERVICES THROUGH MCH HANDBOOK PROJECT

1999

〈実物大〉

はじめまして。

JICA
野田 奈緒子

北スラウェシ 日本人会にこの 4 月に入会した、野田奈緒子と申します。よろしくお願い申し上げます。3 月終わりに西スマトラのパダンからここマナドに引越してきました。実は日本人会の方々にはマナド空港に着いた時から（もっと以前から？？）御世話になっています。というのも、西スマトラのパダンで飼っていた犬を後先顧みず飛行機に乗せ連れてきました。大変寛容な前田会長のお言葉に甘えて 5 月中旬に借家に引越すまで、前田会長に犬の面倒を見て頂きました。この誌面でもう一度会長にお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。今やっと犬を引き取りマナドでの生活を整えつつあります。

今回 JICA（Japan International Cooperation Agency：国際協力事業団）の保健プロジェクトの仕事でここに滞在しております。保健省州出張所（Kanwil Departmen Kesehatan）内に事務所を設け、母子健康手帳を媒介に母子保健を向上させるためにインドネシア人と共に仕事をしています。私の仕事については、同僚の芝山さんの内容を読んで頂けたらと思いますので、このあたりで私は違うことを書き始めたいと思います。

前任地西スマトラには約 6 ヵ月滞在しました。西スマトラと言いますと、母系家族で有名なミナンカバウ族の故郷でイスラム色の強いところです。実はマナドに来た当初カルチャーショックを受けていました。まずは、人の服装。パダンではマナドのように袖なしや短いスカートをはいた女性が街中を歩いている姿を見かけることはありません。そのよな服装は少数の中華系の人か外国人（極々少数）でした。よって、こちらに来て、女性の肌の露出度が高いことに驚きました。それに、パダンでは小学校 1 年生くらいの小さい子からおばあさんまで多くの女性がベールを頭に被っていますが、ここではほとんど見かけません。次に、モスクからのお祈りの代わりに、教会から讃美歌が聞こえるようになりました。どちらがいいかは、別の問題ですが、、、。もう 1 つは、スーパーに置いてある食品の違いです。 パダンにも Matahari、Suzuya と大型スーパーがありますが、生鮮食料品は一切置いていません。魚、肉などは PASAR で買わなければなりませんでした。こちらでは、普通のスーパーで豚肉売り場を見かけますし、牛乳、ヨーグルト、チーズなど、乳製品を手に入れるのがパダンでは非常に困難でしたが、こちらでは楽に手に入ります。嗜好によりますが、個人的にはとても助かっています。

ところで、犬のはなしになりますが、西スマトラはイスラム教徒が多いところ、イスラム教徒は犬を不浄と見なし嫌うようですが、なぜか西スマトラでは多くの人が犬を飼っていました。地元の友人によると、理由１：イスラム教徒が犬を嫌うのでそれを逆手にとり、番犬として飼っている。理由２：娯楽として野豚狩りをしているので、その狩りのために飼っている。理由３：娯楽としてドックレースを開催するので、その競争犬として飼っている。との返事をもらいました。野豚狩りで仕留めた豚は自分たちでは食べませんから、狩りをした犬の餌になるそうです。また、ドックレースの犬はレース前にはなぜか人間以上の扱いを受けるようです。レース前にはシャンプーし、玉子を食べさせ、栄養ドリンクを飲ませるそうです。ここ北スラウェシでも犬を多く見かけますが、どういう目的があるのでしょうか。

私の犬はいわゆるペット兼番犬ですが、どうも番犬には向いていないようです。人なつこくて、見知らぬ人にも吠えずにしっぽを振っています。逆に吠えるのは私や近くにいる人が相手をしない時です。（ということは、もし泥棒が来て、相手にしないと吠えるのでしょうか？？？）

日本人会の皆さんは、犬とかお好きですか。

北スラウェシにはあと１年４ヵ月ほど滞在する予定ですので、日本人会の皆さんよろしくお願いいたします。

写真で見るとハンサムな(!?)わが家のチエ太郎です。

1999年5月30日
マナドの自宅にて。

インドネシアートモホン町に別荘を作って見て

川口　博康

１０年位前になるでしょうか仕事でこの地に来るようになった仲間がここに別荘を作ろうかと真剣に話し合った事があります。その後中心となったＳ氏が転勤でバンコクに行ってしまった関係からついうやむやになってしまいました。
まさか当時の仲間であった私が別荘を作ってしまうなんて本気にしないと思いますのと、いつもお世話になっております日本人会の皆さんの参考になればと思いその顛末を記しておきます。
昨年５月の例の騒動のすこし前にドル預金が引き出せなくなったり（引き出せても３０％位目減りがしたり）また経験もしたことのない為替ールピアが大暴落になったりと、これからどうなってしまうのかまったく見当もつかないときでした。
国がなくなってしまうことはないだろうという大前提のなかで土地と家を契約しました。たしかに法律も分かりませんので名義はまだ私のものになってはいません。
知人の大学の先生の名前です。皆さんからいろいろアドバイス受けました。
注意しなさいと。所詮言葉だって分からないものにとってどのように注意するのか。まあ遊びと思うしか納得のしようがありませんでした。遊びはリスクの大きい方が楽しいではないかと自分に言い聞かせたりして。
予算は駐在から帰って記念に作ろうと思っていたお墓と車の予算５００万円の範囲。家内には当分の間、車とお墓は延期の旨無理矢理了解を取りました。おそらく我が家では馬鹿おやじが何を血迷ったかくだらない事をいっているのか位に思っていた事でしょう。
土地選びは大好きなロコン山が見えるところを第一条件であちこち見て歩きました。なかなか思うような土地は見つかりませんでした。これは良いと思う土地はすでに買われていたりでーーー。ある日女中さんが親戚の者が土地を売りたいと言っているのでみてほしいと言ってきましたので早速検品に行きました。一部大木と林が残っておりロコン山も良い距離から見えるのですぐに決めました。
村長さんなどが立ち会い正式に測量ーくい打ち 書類作成と同時に現金支払６０００万ルピア以上は税金がつくということでアンダーバリューにてーーーー。
約９０００立方M　１立方M＝一万ルピア＝￥１３３　何か大地主になったような感じ。昔読んだ本「貧乏物語」にありました。貧乏ー金持ちとは相対的なものーー周りに比べての話と。そうは言ってもつい日本と比べてしまうー安い物とーー・
この辺がインドネシアでの落とし穴なのでしょうね。しかし所詮私も馬鹿な人間、リッチになった気分が本当にしました。土地神話の中で育った人間のあさはかさでしょうね。いろいろ手数料や謝礼を入れて１３０万円で３０００坪。話の種です。
退職した人間は自由があるのですから何も日本に固定しなくてもと本気で考えてし

まいます。
家の図面は概略の平面図だけを私が書いて請け負い業者と交渉し，今までにどんな家を作ったか現場を確認し、ランクー品質について交渉しました。こちらの希望は屋根の瓦はジャカルタから床は大理石を指定したことくらいです。このため３０％高くつくとのことでした。水は６０Mのボーリング、風呂場の付属品、勝手場など全てあわせすぐに生活できる事を条件で １６７，０００，０００ルピア（約２３０万円）引き渡しが１２月末ということで契約。
結果とすれば４月に新築祝いをやったのですがまだ未完成、これから手直しなどーーやはりインドネシア特有のジャムカラットー時間の延長となってしまいました。
遅れの最大の言い訳は近年にない大雨続きとのことでしたが理由はいろいろあるでしょうがこれがこちらではこれが普通ではないでしょうか。日本人のマネージメントが入らない限り無理と思います。確かに時々不安にもなりました言葉だって良く分からないなかで半分は前払いーほんとうに出来るのかなと正直思いました。
しかし、こちらの方の遣り方というのでしょうか，何だかんだと言いながら私とすればほぼ満足する家を作ってしまいました。何か疑ったりして申し訳なかったと反省しています。
工事については私に知識がありませんので良く説明できませんが日本のやり方とはだいぶ違っているようでした。工事現場に時々見に行きましたがあまりにゆっくり過ぎてうんざりする事の方が多かったですね。まあ大工さんのご機嫌とるために時々差し入れにパンや菓子を持っていきました。
あくまでプライベートなことですので仕事とは一切関わりのない友達にお願いしました。仕事がうまくいっているときは個人の関係も良いのでしょうが私の関係している仕事はそんなに甘いものではありませんので又変にかんぐられて遊びと夢が台無しにならないようにとの配慮からです。気持ちに負担がありませんので楽ですね。

参考までに現在までに掛かった費用は以下の通りです。

土地　　約３０００坪	ＲＰ．９０，０００，０００．
登記 手数料	２，０００，０００
家 建築費用（建坪約８０坪）	１６９，０００，０００．
取り付け 道　３×１５０Ｍ	３，０００，０００．
電気 引き込み 費用	１０，８６４，５００
テレビ冷蔵庫台所用品他	１６，１１０，２５０．
家具 絵画	４０，７７０，０００．
家具	３３，７５０，０００．
パーティ新築祝い	６，７７５，０００．

合計　　RP. 372, 269, 750.
　　為替RP75／¥　　¥ 4, 963, 597.
この他の費用として周りの柵を予定しています。
最初は木を植えたのですが牛や馬が食べてしまったり倒してしまったりで
うまくいかず仕方なく柵をすることにしました。

維持管理費として
守衛　1．0名　　RP. 200, 000.
女中　1．5名　　300, 000.
電気　　200, 000.
その他　予備費として　　300, 000.
合計　　RP. 1, 000, 000.
　為替RP70／¥　　¥ 14, 300.

ウイークデイはビトン市で仕事ですので、まだ数日間しか使ってないのですが感想を
以下に記します。
1．短時間の停電（数分間）　　が数回あります。
2．電話がまだ引けない。携帯電話—COMSELINDOであれば通話可能と
3．夜小さな虫が侵入してくるときもある。蚊—ハエは意外といない
4．空気がうまい。星がきれい。
5．特に早朝—夕方のロコン山は期待どうり。
6．日中の部屋の気温は22－23Cでビトンより5C位低い。夜は掛け布団がほしい
　夜間は20－21cと寒いくらい。
7．良い魚が入らないかわりに野菜が新鮮。魚はビトンが最高。
8．ビトンより安全と思う。100%クリスチャン　イスラム教の早朝のスピーカー
　からのお祈りの声がない。協会の鐘のみ。
9．音は殆ど自然のものや動物の鳴き声、人工音は殆どない。
10．温泉が近くに七個所ばかりあり気安く行けるようになった。
　地理的にミナハサ観光スポットの中心となった

＊　今後について
維持管理費がつき1－2万円と安いのが助かります。
今年11月で停年退職となりますので帰国します。何か仕事を探しますか゛できれば
年に数回こちらにこれればラッキーと思っています。65歳くらいまでは仕事が出来
ればと———。期待しています。
この間、こちらでお世話になった友達や日本の方々に使って頂ければありがたいと

思っています。
私がこちらに駐在中に今迄お世話になった兄気分やこれから自由な時間が作れる事を楽しみにしていた友達が先に旅立ってしまい寂しさを味わいました。これから年をとっていく中で新しい皆さんとの出会いの場所にでもなればと楽しみにしています。
日本人会のみなさんで利用される方がありましたら是非使って下さい。
但し宿泊日数は基本的には一週間以内とし、食料は自己負担として下さい。
ゲストブックにお名前を記入して頂ければ有り難いですが。

その他
今回はインドネシアのどさくさに紛れて久しぶりに息抜きの遊びをしてしまいました。こんな事、誰もしませんのでおそらく大方の皆さんは馬鹿な奴とお笑いと思います。ほんとうに真面目に考えてやることではないでしょう。
ちかじかこの国にもリタイアビザがでるとニュースにありました。外国人として土地家の購入も可能との報道もありました。現在は何一つとして私の名義のものはありません。まあもう少し気長に夢をつなぎ待ちます。
今年になり周りには外国人、ジャカルタから移ってきた家族、スラバヤからの集団移住、華僑の別荘と急に賑やかになっています。

どうもこの頃の内地からの報道みますに何となく老後の生活しにくくなっているのではとの不安があります。老後はいくら生活費が掛かるのかわかりませんがなんとなく慎ましやかな生活は望めそうになく惨めな生活も考えられます。
このような状況の中で月２０万円の年金でどうやって生活していくかの選択肢の一つにこちらに３－４回滞在することも旅費も入れて可能であることに何か老後もやって行けるんじゃないかとノウテンキぶりです。
老人力がついてきますと、今迄生きてこられたのだからこれからも何とか生きて行けるのではと赤道直下ヤシ酒をあおりながら思いますね。

家だけは金融危機以前（１９９７）当時より円換算で１／２－１／３でできたのではないでしょうか。人生何が幸いするか、時々神様は貧乏人にも手を差し伸べてのれるのでしょうか。こちらにおりますと何回となく礼拝に付き合っています。御利益があったと素直に喜びたいと思います。
家具とか電気製品は現在の価格です。

私の家は御前崎ですのでここから成田ーシンガポールーメナードー別荘まで約２４時間
費用はすべて含んで往復約１０万円です。定年後どこまで利用できますか。
はたまた、馬鹿な奴の夢の後――生活費のために売りに出した時はよろしくお助け下さい

原価はこんなに安いのではないかといって値切らないで下さい。今の世の中原価主義は無くなり市場主義が世界のスタンダートとなのですからーーー。

私の大昔からの夢はヨットのオーナーになる事です。しかし夢はだんだん萎んで今ではペーパードライバーと同じで雑誌やボートショーに出かけるのがせきのやま。しかしまだあきらめたわけではありません。夢は死ぬまでタダデみれますので。宝くじだってあります。その昔我が家で一億円あたったら何に使うかとこたつを囲んで話し合った事があります。２５００万円しか使い道がなかったことがあります。意外と我が家の夢は小さかった事覚えています。
横道に逸れてしまいました。
近所の方達とも少しずつ話す機会が増えてきました。
地元の皆さんがここは安全ですよと言うのに夢を託して老後のささやかなたのしみにしばらくの間とっておきます。　　以上

ビトンでの鰹節製造の歴史について（2）

川口　博康

ＢＢ．ビトンにおける戦後の鰹節工場について

第二次世界大戦で全施設が破壊され、再建できず戦争が終結した１９４５年に、オランダ人がこの東印度水産株式会社を統合してＩＮＳＴＩＴＵＴ　ＶＯＯＲ　ＤＥ　ＺＥＥ　ＶＩＳＳＥＲＴという会社を設立し事業の継続を図っています。
インドネシアが独立すると上記会社は政府が管轄することになり１９５１年まで経営は現地人によつて行われています。
１９６０年に政府が外資系企業の国有化を宣言したときこの会社はＹＡＹＡＳＡＮ　ＰＥＲＩＫＡＮＡＮ　ＩＮＤＯＮＥＳＩＡと名をあらため１９７０年さらにＰＮ　ＰＥＲＩＫＡＮＩ　ＴＩＭＵＲと改名しインドネシア最大のかつお漁業会社となり、さらに１９７３年政令によりＰＴ　ＰＥＲＩＫＡＮＩＳＵＬＵＴＴＥＮＧと改め、現在の公社は１９８６年になつて政府は国民的核会社（ＰＥＲＵＳＡＨＡＮ　ＩＮＴＩ　ＲＡＫＹＡＴ）を組織し、まず農業のプランテーションに適用し次いで漁業にも適用しています。
漁業の場合は核漁業会社（ＰＥＲＩＫＡＮＡＮ　ＩＮＴＩ　ＲＡＫＹＡＴ＝ＰＩＲ＝ピル）である。この組織は、核（又は親）となる漁業会社がプラズマ（又は子）にあたる複数の漁民に便宜を供与するもので、北スラウェシではＰＴ　ＰＥＲＩＫＡＮＩが核会社に指定され、約５００人の漁民を傘下につけていました。
ＰＩＲ組織は、核となる親会社が零細な漁民の漁獲物を買い取り一集荷し、その販路を開拓拡大して漁業の発展をはかることを目的にしており、ＰＩＲ組織を持つ鰹マグロ企業は国営四社と民間二社とのことです。
一本釣り鰹船はほとんど華僑系の船主で占めており当時からプリブミには銀行はお金を融資しなかったようです。理由として経済観念―借金は返すものという概念がなく信用を得られなかったのが大きな原因であったようです。
現在でも資本を蓄積して仕事を大きくしようとする向上心は少ないように見受けます。其の時々の生活の中で派手に使ってしまうという文化がこのミナハサでは一般的では無いでしょうか。

終戦から約２４年たってからこのビトンに日本人がかつお節製造を目的に渡航してきました。やはりその繋がりは大岩氏との関係者でした。

ＡＡ．ＰＴ．ＴＡＲＷＩＳ
１９６９年、戦時中ウジュンパンダンにて市長をやっていた文野氏（ブンノ）が日本から入ってきた。南方物産と言う会社をもっていた。現在の水産学校の付近に鰹節工場を作り、技術者として中川氏（大岩氏の一番下の兄弟でありトミー氏とは叔父にあたる）も一緒に来て仕事をしていた。経理として台湾人の ？？．社長はもとジャカルタのイミグレの所長―――Ｇ．Ｍとしてフランス氏（大岩氏の子供，トミー氏とは異母兄弟、戦後のビトンの鰹節工場にいつも現地側の主役として登場してくる。
今は牧師の肩書きと企業家としての顔を持っている）
１９７０年工場完成 この年初めて製品５トンを輸出する。
１９７１／１９７３にかけ製品は２７－７５トン／年製造し日本に輸出していた。
日本での販売は東京の鰹節問屋―石田商店が一手に行っていたようです。

トミー氏はこの叔父―中川氏とは気が合わなかった。トミー氏のお母さんを頼ってきたのであるが、着た当所から自分の子供より年の若い女性と一緒になったりしたため波長が合わなかったようです。ビトンで亡くなっておりこちらにお墓もあるとのことです。失敗の原因は、当時ニチロが１０００トン位の冷凍船を持ってきて鰹の買い付けを初めたため工場で使う原料の買い付けが競合しはじめ、これに負けてしまったことが一番大きかったとのことです。
１９７２年頃ペリカニ（公社）が冷蔵庫を日本の援助―戦争賠償金でつくった。
ニチロは一年位現地買い付けで船内凍結方式をやっていたがこの国の法律が新しく出来国営の会社があるところで現地買い付けはできないことになり、ニチロは基地をテルナテに移した。ここで現地買い付けの事業を行うも三年位で中止。

BB. PT. SIRSAN
新しく会社設立する。社長はFRANS E. WUISAN（大岩氏の息子でトミー氏異母兄弟）。TOSHINORI BUNNO氏が運転資金だして１９７３－１９７６まで上記と同じ工場を使い鰹節の製造に従事する。銀行借入れもしたが原料の買い付け資金が少なかった。
PT. NONAHOA は　漁船四隻所有し原料であるかつおをＳＩＲＳＡＮに供給していた。決済方法は現金がなかったため輸出後商品代が入金してから支払っていたが工場側が約束を守れなくなり支払できなくなったため商品代の変わりに工場を差し押さえた。一番の原因は原料の鮮度が悪く製品を輸出するも商品代金を支払ってもらえなかった。工場の所有者はＰＴ．ＮＯＮＡＨＯＡになり１９７７年から１９７９年まで製造、１００トン位／年に輸出していたとの事です。
先の文野氏が双洋産商に紹介しＪ．Ｖとし新しい展開になって行ったとの事です。
当時、道路が良くなり輸送が発達―魚の鮮度も良い状態で消費地に運べるようになったため食用としての販売の方が良くなってきた。フリーマーケット制で有り漁場も遠くなったり、また当時は、日帰りであったが漁船の構造が防熱をほどこして無く良い成績をあげられず、スポンサーであるＮＯＮＡＨＯＡが倒産し漁船を手放し工場も閉鎖となったとのことです。

CC. PT. SIRSANBARU
１９７９年に上記会社設立、
１９８０年 現在のシナノマスの敷地内に工場建設
この時一度日本に帰っていた中川氏が再度きてサメの天火干し（DENDEN）を製造し一年ぐらい日本に輸出していた。
１９８２－１９８３約二年間、双洋産商―ヤマキ（？）からの技術者であるサタケ氏の監督のもとに鰹節製品７５トン／年日本に輸出する計画であったが実際には１８トン／年しかできなかった。東京の鰹節問屋―石田商店に二回ほど出荷する。
１９８４年中止。その後技術の中村氏（佐竹氏の甥）はソロモンに行った。
１９８４年新しく東康工業（田中社長）が参入しスポンサーとなり工場再会する。
工場の土地はトミー氏の叔父さん（中川大八郎）が購入したものであるが社長はフランス（義弟）の名前を使った。運転資金はプナイナハン銀行のＳＯＮＤＡＲ出身のＲＡＴＵ社長が資金を出した。日本人では田中社長の他に平山氏、技術の渡辺氏マネージメントの大川氏などの名前がでてくる。技術者としては高知県出身の中村氏も駐在していた。現地側技術者として山川の協栄で勉強してきたジミーシノブ氏がいる。後にＳＡＲＵＮＴＷＡＹＡ―大茂水産の工場長などもやっている。

１９８７年に地元華僑のトーマス氏（ＫＥＭ ＪＡＹＡ）が参加，ＴＯＫＯＫＯＧＹＯとＪ．Ｖとして新しくＯＣＥＡＮ ＳＵＩＳＡＮを設立――資金導入する。
トーマス氏が参入後火災等（１９８８－８）あり事業はうまくいかなかったためその関係は複雑であったらしい。３５－１００トン／年位輸出していたとの事です。
今迄、原料の鰹をサプライしていたデニー氏（当時漁船三隻所有）が介入してきたと言われているがお金は出していなかったようである。
１９９１年周りの土地をシナノマスの建設用地として買われて工場に入る道が無くなってしまったことと、原料の鮮度悪いものが混入し製品代金回収できないなどが重なり工場を閉鎖する。
最後の数ヶ月は丸紅経由にて東海澱粉にも販売していた。この時の縁で現在メナードミナで工場長をやっているコルネウス氏は鰹節の技術の勉強に三重―焼津に渡航している。
デニー氏はここで鰹節のことを充分に勉強し、また日本に技術の取得に渡航する。
鹿児島―山川町―キョウエイ鰹節（ヤマキグループ）の指導を受けてこの国で一番のテクニシャンﾌﾟﾗｽ経営者となり一年後サリーチャカランで鰹節工場を建設、全量日本に輸出、現在は鰹節を中心に最大の水産会社に成長している。

ＤＤ．Ｐ.Ｔ．ＨＡＲＭＡＳ ＳＡＨＡＢＡＴ ＰＥＲＫＡＳＡ
ジャカルタの大手化学会社―ＡＮＫＡ ＫＩＭＩＹＡ ＲＡＹＡ（ハリアント社長）と地元華僑のトーマス氏（ＯＣＥＡＮ ＳＵＩＳＡＮ）が新しく設立
１９８７年にメナード市の近くカラセ地区に工場建設
１９８９年より製造スタート。アネカキミヤが味の素と近かった為、本だし用原料のかつおぶしの製造拠点の一つとしての思惑もあって設立されたものと思われる。
当時この工場を使って丸紅―東海澱粉―トマル水産、三菱―富士冷が技術指導―鰹節製造の可能性について調査しています。１９９２年製造中止。
理由はこの地区が線引きとなり工場での製造出来なくなった事と味の素の取り組みがトーンダウンしたこと、原料が安定して入手出来なかった事などが挙げられます。
輸出先は丸紅―東海、三菱―富士冷

ＥＥ．Ｐ.Ｔ．ＳＡＲＵＮＴＡＷＡＹＡ
アムラン地区にあり現在稼動とているかつお節工場では最も古い工場である。
１９７８年設立、丸善（渡辺、鈴木、播磨、須田の各氏）によって設立されたとの事
１９７９年には休止となる。
１９８０／１９８２年に渡辺、鈴木の二名が丸善が引き上げた後戻ってきて再開
日本より一本釣り船を導入。
１９８３／１９８５年 ｓａｒｕｎｔａｗａｙａが独自で運営。
１９８６／１９８７年　中原氏が運営
１９９１／１９９２年　日本人？
１９９５／２月より（株）マルモが運営、現在に至る。
この工場の製造上の特徴は乾燥工程に手火山方式が採用されていることである。
現在日本では殆ど見られなくなった工程である。

ＦＦ．トーマス氏の工場
ﾗﾗﾌﾞｱﾝｳｷに１９？？　年に建設するも初めから現在に至るまで稼動していない

ＧＧ．Ｐ.Ｔ．ＴＯＭＩＮＩ ＳＡＫＡＮＡ

もと公社のペリカニの社長をしていたシギット氏がモートンに設立、現在は鰹節工場は休業中―鰹、キメジの凍結のみ稼動している。

CC．その他の地区における鰹節工場

A．中部スラウエシ州
　LUWUK市の近く
　PT．OMEが作った工場
　1996―― 工場訪問するも稼動していない

B．東部スラウエシ州――
ケンダリ市－KENDARI
1990頃この地を視察した時は小さな鰹節工場がほんの少し製造していた。
後にPT．OMEが二個所工場をつくり稼動している（1984設立）
数量は5－10トン／月程度
販売先は野村貿易経由マルハチ村松

バウバウ市―BAUBAU市
小さな工場が2つあり、（PT．ARAHON　INDAH）と（PT．OME設立は1989）どちらも日本に輸出しているが原料の水揚げが継続されず各社共、製品は年間数十トンの輸出となっています。三井物産経由大茂水産

C．FLORES島―MAUMERI市
PT．OMEの工場　（設立は1991、月間5－10トン

D．MALUKU州
SERAMU島――MASGI町　　深沢グループ（鹿児島県山川町のカネス鈴木商店が鰹節関係は中心であった）によって水産基地としては大規模な本格的なものであるがテスト操業のみで本格的な製造は未だなされていない。（1997ほ設立）
他に中原氏グローブが作った工場、他に？？氏が作った工場が操業再開しているがコンスタントな操業には至っていないようです。

T．BANGUN KARYA ― BACAN島に5－10トン／月の工場あったが1997年より中止
E．イリアンジャヤ――SORONG市
PT／OMEの工場（設立は1993）
月産5－10トン
E．LARANTUKA
PT．OMEによって1998設立

以上、PT．OMEの工場は4－5個所にあり年間200／400トンを輸出している。いずれも野村貿易経由マルハチ村松が主な取り扱いとなっています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊：：：
現在操業中の鰹節工場　(各工場とも稼動中であり、企業秘密もあるやも知れませんのでその子細は避ける事とします。いずれもその製品の大部分が日本向けであり各社とも日系企業が深くかかわっているため)

A. PT. SARI CAKALANG
工場能力は１０トン／日　×　２工場
乾燥装置が独立していなく急造庫に直接入れる方式

B. PT. SARI MARALUGIS
工場能力は１０トン／日
構造はＳ／Ｃと同じ

C. PT. PERIKANI
工場能力は１０トン／日
構造はＳ／Ｃと同じ

D. PT. MEGA GALAXY
工場能力は１０トン／日
乾燥庫をもっており又蒸気殺菌装置も持った当地区では一番衛生的な工場

E. PT. MANADONIMA
工場能力は１８トン／日
焼津式乾燥庫を取り付けている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

インドネシアにおける鰹節製造の歴史について
A. 初期の工場において作られた製品の最大の問題点は原料の鮮度不良による製品の品質のブレと思われます。　当時は製氷設備がほとんど無く漁船が氷を積んでいかなかった為漁獲してから製造までの時間は７時間が限度であった。
現在でも日帰りの漁船は殆ど氷を積んでいかないのが特徴。
B. 販売できるものがかつおだけだったためシーズンオフには製造出来ず効率が悪かった。近年はスーパーのめんつゆの販売の急激な伸びに支えられソーダかつおの需要が多くある為かつおとソーダを中心に周年操業が可能になった。
C. 戦前の工場はほとんどが手火山方式を採用している。現在は一社のみ焼津式乾燥機を採用したのわメナードミナが最初でメガギャラクシーがそれに続いている　。
これは電気もなかったところでは当然なことと思われるが製品作りにおいては大量生産が出来ない事が欠点といえる。しかし良い面もあるので一概に結論は出せない。
D. 漁業が発達していないため漁船の操業効率が非常に悪い。
漁船を操船するにはある程度の教育が必要であるがそれに対する教育はしていなかった。一部の民族しか操船はできない。一般的には漁師には向いていない
E. 資本の蓄積がなく漁船や工場の建設が思うような物ができなかった。
F. インフラー漁船―漁民―資本―港などの整備がされてなくトータルコストは高く

つく。

G．鰹節を食べるという食文化がなかった。地元の人達では鰹節の製造は出来ない
出来た製品の善し悪しが判らない。味というものが理解できない。 しかし
イカンフーフーというなまり節に似たものは広く普及している。

H．ビトン地区が鰹節工場として適している理由

1．インフラがしっかりしている。港―電気―通信―労働者
2．原料のかつおとソーダを昔から獲っていた。原料が入手しやすい
花削り用の原料として脂の少ない原料が豊富である。
3．消費地である日本との接触があった。大岩ファミリーを中心として
戦前から日本人漁師がかつお釣りを中心に漁業を継続してきた。
4．湿度が高いため鰹節は作り易い。
5．水が非常にきれいであり簡単に入手しやすい。地下水が６０－８０Mボーリングすることで簡単に入手できる。他地区では珊瑚礁系であるため水は濁っていて衛生的ではない。この地は火山系の地下水である。
6．小さな華僑資本が存在していた。漁船のオーナーや工場のオーナーの殆どが華僑である。これらの資本家がこの１０年間で大きく育ってインドネシアでも安定した有数な水産基地となっている。
7．付近一帯から原料の搬入が可能になってきた。マルク州―ハルマヘラ島
トラックとフェリーを使っている。北スラウェシ州各漁港からも搬入可能となってきた。氷が大量にできるようになったことと道路の整備、車の発達があげられる。
近年はフィリッピンの巻き網船からの搬入が盛んになってきた。
これが問題

I．現状の問題点（文化の違いによること）

1．多くのメーカーの経営者は良いものを作ろうとする気概―認識がない。
品質を向上させようとする職人気質―社風が工場に定着しない。
2．中間管理職以上でマネージメントが出来ない。
3．神様中心の考えかた一生き方。文化の違い
同僚や下の者に仕事上の注意や指示を与えない。人を怒れるのは神だけという教え。給料は神からの思し召しと。人間には感謝しない。
4．工業化に必要な基本的概念、時間と寸法を合わせる事は非常に苦手。
時間はあまりにも有名。ＴＩＭＥＩＳ ＭＡＮＥＹの意味を理解できない。
整理―整頓―後片付けーこれを実行するのに年単位の時間がかかる。
記録をとる習慣がない一機械などの日誌―データをとらない。データをもとに対策―改善ができない。効率と言う概念が理解できない。
5．社会構造が階級社会となっている。上下の新陳代謝がない
遺産相続税がないので資産家は代々バカでも楽に暮らせる
権力をもったグループに属していれば何らかの恩恵はあるがそれ以外は恩恵はない。
6．植民地的考え 積極性―自立―意欲がない 恐ろしく生産性を低下させている
7． 官民全体が文化として汚職体質となって定着している。家族主義

８．　法律の整合性がない　裁判ですらお金の多い方が勝つ
９．　社会正義が無い
１０．　文化―文明の違いはお互いにストレスを増大させる。日本では会社の為という会社第一主義であるがこちらにはこの概念がない。
１１．　経営者の公私混同
１２．　複式簿記の概念が無い　キャッシュフローのみ
１３．　人と人との関係が優先する社会　ファミリー中心。法治国家といっても情―理―法の順序で物事が動いている。
１４．　華僑とプリブミ　　クリスチャンとイスラム―仏教―ヒンズー教等の文明の衝突は今後国内で最大の問題となっていくとおもわれる
１５．　部族―種族　文明の衝突として。
１６．　軍事国家
１７．　華僑―プリブミとの住みわけ
１８．　金融危機は為替の大幅なルピア安となり多くの経営者は工場の品質管理よりも日々大きく変わる為替に関心が移ってしまっている
１９．　汚職文化はすぐには改善されないのでは。
２０．　組織の運営―マネージメントの意味が分からない。
上級職になれば楽をする―遊んでいて良いとの概念

要するに如何なる国にあっても、文化の違いのなかで如何に事業展開するか技術的な問題以上に、この辺の事を理解していないと仕事の定着化は困難ではないでしょうか多くのプロジェクトが外国人―日本人が帰ってしまえばだめになってしまうという現実でみるように技術移転においてすら定着化は非常に難しいしごとと考えます。

北スラウェシ州 鰹節類輸出数量 （ＫＧ）

１９９２	４１０，４００
１９９３	５６４，７５０
１９９４	６０４，５１５
１９９５	１，３７７，６７６
１９９６	１，７９３，３７３
１９９７	１，９２４，７３５
１９９８	２，７３９，３６６

＊＊＊＊＊　１９９５ 輸出量が倍増しているのはメナードミナ社とサルンタワヤ社が工場スタート製造に入ったからです。また、全インドネシアからの輸出量の約９０％がこの北スラウェシ州からとなっています。

＊

１９９８年 会社別 輸出数量　（ＫＧ）　北スラウェシ州

サリーチャカラン	８４５，４８５
サリーマラロギス	２０３，０６０
ペリカニ	２７４，２１０
サルンタワヤ	３４８，０６２
メナードミナ	７９１，５９６
メガギャラクシー	２７６，９５３

合計　　2，739，366

＊＊＊現地からかつお節の製造を日本に勉強に行った方達＊＊＊

1．KORNELIUS KILAPONG
　1989－7／8月　三重県と静岡県　伊藤組合長　浜陣
　1998－4／5月　静岡県　カネヤマ
2．JIMMY SINOBU
　1989－8／9月　山川町　キョウエイかつお節
　1993－7　清水市
3．POLTJE YANGIN
　1990－1991　12／5月　キョウエイかつお節

＊＊＊戦後の日本のマーケットの変化との関係＊＊＊＊
原料―かつおの大部分は一本釣り漁船によって漁獲されていました。
戦後の当初は全量氷につけて保管されていたのですが、漁場の遠隔化は冷凍技術の発達によって克服されかつお節の原料は一本釣り冷凍南方かつおが主に使われてきましたが、この冷凍かつおが生食用として高値で取り引きされるようになりかつお節の原料としては使用されなくなり、変わりに急速に発達した大型巻き網船で獲った鰹が原料として主流になってきました。しかしこれの欠点として原料としての品質―油分が多い―ことにより削りとしての原料には向かないことがあげられます。このため油分の少ない鰹の輸入をインドネシアを中心に赤道付近海域からの基地から開始しました。４－５万トン／年。このような中で 現地で製品化してより付加価値をつけて輸出するという発想が生まれてきました。
製品―戦後かつお節は荒本やほんぶし中心の流通形態でした（各家庭で削って）が次第に工場で削りーパックに入れて販売されるようになってきました。パック入りの削りの原料としては油分の少ないものが要求され、従来日本近海で獲れてかつお節の原料とされていたものから油分の少ない南方かつおに需要が変わって行きました。
（油分が多いものは脂の酸化によって味や色が変わるために適さない）。次に新しく粉末や液体調味料が開発され現在ではこれらが大きなシェアを持つようになっています。ブランドオーナーとしては大量生産によるため原料としては安定した均一したものを大量に要求するようになってきました。
日本近海では漁場が四季の変化によって魚質が安定せず安定供給は難しく、赤道付近でとれた鰹であれば可能です。
為替―円高に移行するなかで海外での製造も魅力が出てきた。
日本でのかつお節製造は３Ｋに属し人気がなく従業員が高齢化している。
などの背景のなかでビトン地区でのかつお節製造はスタートしています。
：：：：
今後の見通しーーーー 削除

インドネシアのまぐろ延縄漁業 (2)

長崎 節夫

第Ⅱ章. インドネシアのまぐろ操業

まぐろ延縄漁業は、日本で生まれ発達した。
それは、始めのうちは小型漁船による沿岸域でのナマまぐろ操業だったのが、次第に漁船の大型化、冷凍まぐろの生産、漁場の拡大と進展していった。それは、物事が進歩、成長する時の自然の流れ（順序）である。
しかし、まぐろ延縄漁業の技術移入国であるインドネシアの場合は、順序が逆になった。
インドネシアでは、冷凍まぐろの生産から始まった。

Ⅱ－1. 冷凍まぐろ延縄漁船の導入

１９５０年代から６０年代にかけての、まぐろ延縄漁業隆盛期に、日本のまぐろ延縄漁船は、ニューギニア島北岸域からセレベス海、マルク海、バンダ海などでキハダマグロ、メバチマグロを獲りまくった。２００海里経済水域の出現前で、世界の海は日本の海、であった時代だ。
新生インドネシア国としても、目の前のまぐろ資源に指をくわえていることはない。
１９５４年、K・M・ＢIMA（６８GT）というまぐろ延縄漁船がインドネシア政府によって日本から導入された、という記録があるが、残念ながら手元にそれ以上の資料がない。１９５４年当時のインドネシアの国情を考えれば、たいして有効な利用もできないで終わったと思われる。
さらに、１９６５年にはMINA　JAYA－１（１６７GT）、MINA　JAYA－２（１６７GT）の冷凍まぐろ漁船２隻を導入している。

しかし、インドネシア政府が本格的にまぐろ延縄漁業の技術導入に踏み切ったのは、１９７３年のＰ・Ｓ・Ｂ社（PT. Perikanan Samudera Besar）の設立と操業開始から、といってよい。
Ｐ・Ｓ・Ｂ社は、最初からまぐろ延縄漁業による外貨獲得を目的とした国策会社で、設立時の資本金は、1，１５０万ＵＳドル、（その中、ほぼ半分の５５０万ドルは日本政府援助、残り半分はインドネシア政府出資）であった。

Ｐ・Ｓ・Ｂ社は、日本から１１０ＧＴ型の冷凍まぐろ漁船を５隻、各船に５～６名のインストラクター（日本人乗組員）付きで導入し、１９７５年には本格的な操業が始まった。
さらに１９８１年には１８０～３００ＧＴ型超低温冷凍漁船を３隻導入している。
Ｐ・Ｓ・Ｂ社は、バリ島ＢＥＮＯＡを根拠地にして、現在まで操業を続けているが、まぐろ延縄漁業技術の導入・普及の面でこの会社の功績は大きい。

Ｐ・Ｓ・Ｂ社の操業開始と前後して、民間資本のまぐろ漁業会社もいくつか設立されている。
それらの漁業会社には当初好成績を収めたが、まぐろ資源の減少、日本市場での市況の低迷、或いは経営の未熟さなどで淘汰され、さらに新しい漁業会社が現れては消え、盛衰が激しい。

これら、インドネシアのまぐろ漁業会社はいずれも日本向け輸出用の冷凍まぐろ生産を目的としており、資本、或いは技術面で日本と何らかのつながりを持っている。
特に冷凍漁船を使用しての生産活動は、インドネシア漁民の場合、技術の積み重ね（歴史）がないので、いきなり自分達だけの手で操業をするわけにはいかない。
１９７５年のＰ・Ｓ・Ｂ社の操業開始から既に２０余年を経て、各社のまぐろ漁船で日本人船頭や機関長にしごかれた現地乗組員達が、ようやく一人前に育ってきた、というのが、現在のインドネシアまぐろ漁業界の実情ではなかろうか。

Ⅱ－2. 生鮮まぐろ漁船の導入

１９８６年、バリ島でＢＡＬＩ　ＲＡＹＡ社、ＳＡＲＩ　ＳＥＧＡＲＡ社の新造小型漁船（１９ＧＴＦ・Ｒ・Ｐ製）が生鮮まぐろの操業を開始した。
上記２社の操業をお膳立てしたのは、高知県在の㈱馬詰造船所（馬詰順一社長）、沖縄県在の㈱三高物産（馬詰修社長）、シンガポール在の井村雅志氏（香川県出身）等である。
（ＢＡＬＩ　ＲＡＹＡ社、ＳＡＲＩ　ＳＥＧＡＲＡ社は全く別個の会社であるが、両社の操業を指導し、日本でのナマまぐろの販売を担当したのは三高物産であるので、本稿ではひとまとめにして「三高グループ」と称することにしたい。）

ＢＥＮＯＡ漁港を根拠地にして操業を始めた三高グループの漁船団（最初３隻）は、翌１９８７年１０月にには新築間もないジャカルタ漁港に根拠地を移した。
この頃、ジャカルタ漁港には前記井村氏の手配によって台湾のまぐろ延縄漁船（およそ２０ＧＴ木製）２隻が操業を開始している。そして、翌１９８８年６月、私達４隻のフィリピン船団が参入、ということになり、この時ジャカルタ到着時に港内にいたＢＡＬＩ　ＲＡＹＡ船２隻が私の目に入ったという次第である。
この時点でジャカルタ漁港を根拠地として操業する生鮮まぐろ延縄漁船はわずかに１０数隻（全インドネシアでこれだけ）、インドネシアにおけるナマまぐろ漁業の黎明であった。

Ⅱ－3. 台湾漁船の参入

「ジャカルタで空輸まぐろ.....」のニュースは、まぐろ延縄漁船が使用しているＳ・Ｓ・Ｂ（無線電話用の電波）によって、太平洋、インド洋で操業しているまぐろ漁船群に伝わり、かなりの台湾漁船団が一斉にインドネシア入漁を目ざした。
１９８８年９月頃からジャカルタ漁港に、少ない時は４～５隻、多い時は２０余隻もの台湾漁船が入漁目的でやってきた。

台湾の延縄漁船は、大体３０～５０ＧＴの木造漁船で、船尾をサソリの尻尾のようにはねあげた独特のスタイルをしている。
ブリッジの左右の壁に「三民主義」「大陸反攻」など政治的なスローガンをペンキで書いてあるのが目をひいた。
台湾漁船の船尾がこんなに反り上がっているのは何だろうか。追い波に強い、伝統的な船型だと聞いているが、あのような急傾斜の甲板で乗組員はどのように作業するのか。歩行することさえできないのじゃないか。台湾の漁船を見る度に、私の頭は思い悩み苦しむことになった。

台湾の小型まぐろ漁船の集中で、ジャカルタ漁港はたちまちにして飽和状態となり、思いもよらなかった問題が噴出してきた。
その一つは空輸便のスペースの問題である。
日本向けに運ぶべきまぐろの量が増えたからと言って、国際航空路が直ちに増便されることはない。
貨物取扱業者も、客（荷主）の足元を見ていろいろ駆引してくる。あれやこれやでジャカルタ漁港は居心地が悪くなってきた。

三高グループは、もと居たＢＥＮＯＡ漁港へ引き返した。
台湾漁船もジャカルタ漁港にあふれた分は、ＢＥＮＯＡへ基地を移した。
生鮮まぐろの操業は、日本への空輸が必須条件だから、根拠地となる港は国際空港の近くでなければならない。ジャカルタがだめなら次はＢＥＮＯＡだ。

Ⅱ－4. インドネシア漁船の台頭

１９８９年２月、台湾漁船の急増したジャカルタを逃げ出して、私達は漁場を西インド洋へ移した。

マダガスカル島東岸沿いに操業し、釣ったまぐろ（主にメバチマグロ）は、レユニオン島（仏）で陸揚、モーリシャス島、シンガポール経由で東京に送った。
西インド洋には、日本や台湾の大型まぐろ漁船（冷凍船）が操業していたが、小型漁船による生鮮まぐろ操業は私達が初めてのケースであった。
この操業スタイルにフランス側も興味を示していろいろとアプローチしてきた。現地漁業者の中から生鮮まぐろ操業を行なう者も現われ、フランス本国からも４隻の漁船団がまぐろ釣にレユニオン島へやってきた。（１９９１年）

１９９１年１０月、再度インドネシア入漁。
３年振りに舞い戻ったジャカルタ漁港は様変わりしていた。
台湾漁船はまだかなりの隻数残っていたが、以前ほどの勢力ではなく、その代わりに現地製のまぐろ延縄漁船が港内を圧していた。

インドネシア製のまぐろ漁船は、現地で「バガン」と呼んでいる木造のずんぐりした船型で、大体５０～１００ＧＴ。ジャカルタ漁港内東側の岸壁に常時５０～６０隻数えることができた。
出漁中の船がその２倍いるとみて、１５０隻前後の現地製まぐろ漁船が稼働していたことになる。バリ島のＢＥＮＯＡにも２００隻前後出入りしているという。そしてその数はどんどん増えていった。
現地まぐろ漁船のオーナーはほとんど華僑で、もともと他の漁業（網漁業など）をやっていたのだが、まぐろ延縄漁業に転換したのものもあるが、これまで漁業と関係のない商売をやっていたのが「ナマまぐろ熱」にうかされて飛び込んできたのもいる。

私はバガン船の船型をインドネシア独特のスタイルかと思っていたが、後に中国の広東方面に多い船型だとわかった。インドネシアに多い中国系の船大工によって、この船型が伝わったのだろう。そうであるにしても、今では材料の木材から、造る大工までれっきとしたインドネシア製の船である。
この船に推進用の主機関はほとんどが「ＩＳＵＺＵ」「ＨＩＮＯ」など日本の自動車の中古エンジンに中国製のマリンギヤ（トランスミッション）を接続したものである。アメリカのカミンズや、キャタピラーなどのエンジンを据えつけた船もいる。
漁具はナイロン、浮子、釣針などほとんど台湾製。漁具の仕立ても台湾スタイル。ラインホーラー、ラジオブイなども台湾製。そしてラジオブイの電波を受信する「方向探知機」は日本製。船位測定用のＧ・Ｐ・Ｓは日本製、ヨーロッパ製など。
大型の冷凍まぐろ漁船の場合、その技術の伝搬は、日本⇨インドネシアと一直線であったが、生鮮まぐろ漁船の場合は日本、台湾、中国、インドネシア、アメリカ、西欧等の混合技術である。

Ⅱ－5. 冷凍まぐろ漁船の状況

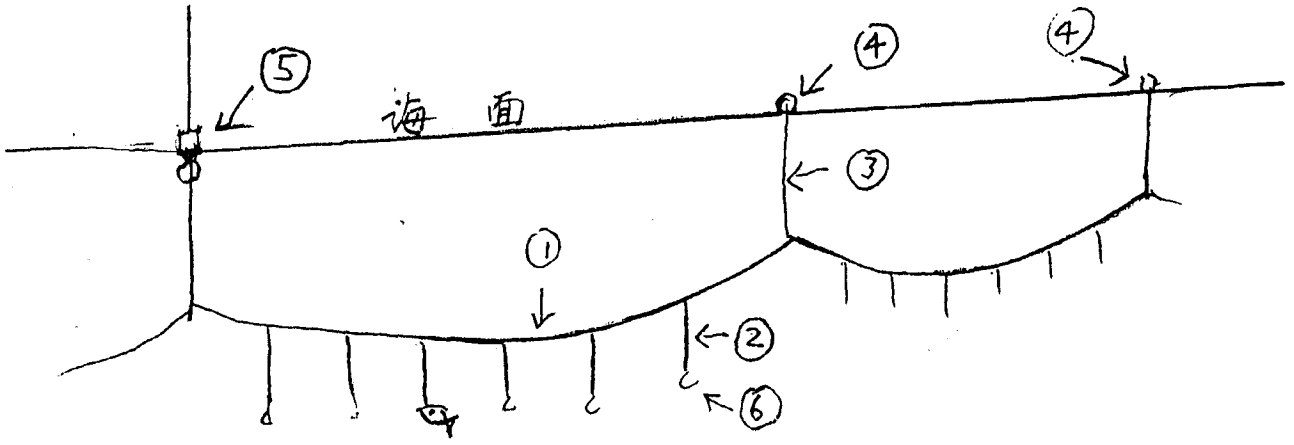
１９９１年にジャカルタに戻ってから、９５年５月にスラウェシ島ビトゥンに移動するまでの３年間、ジャカルタ漁港を根拠地としていた冷凍まぐろ漁船についても付記しておきたい。

当時、ジャカルタ漁港を根拠地として稼働していた冷凍まぐろ漁船は大体２０～２５隻であった。
経営体は、現地（インドネシア）の会社が６、７社、（その中２、３社は完全に日本のダミー会社）、燃料等の補給、漁獲物の冷凍運搬船への転載等のためにジャカルタ漁港を利用している日本漁船が４社で５～６隻。
日本漁船の乗組員は日・イの混乗、現地船籍の冷凍まぐろ漁船には、船頭１名、機関長１名、計２名が日本人で他の２０名前後は全てインドネシア人というのが乗組員構成の標準であった。

総体的に見ると現地製の生鮮まぐろ漁船が細胞分裂するかのように増えていくのに対し、冷凍まぐろ漁船（全部日本製）は次第に勢いを失っていった、というのが当時から現在にかけてのインドネシア冷凍まぐろ漁船の傾向である。

【以下、次号に続く】

まぐろ延縄漁具構成図



① 幹縄　　④ 浮子
② 枝縄　　⑤ ラジオブイ
③ 浮子縄　　⑥ 釣針

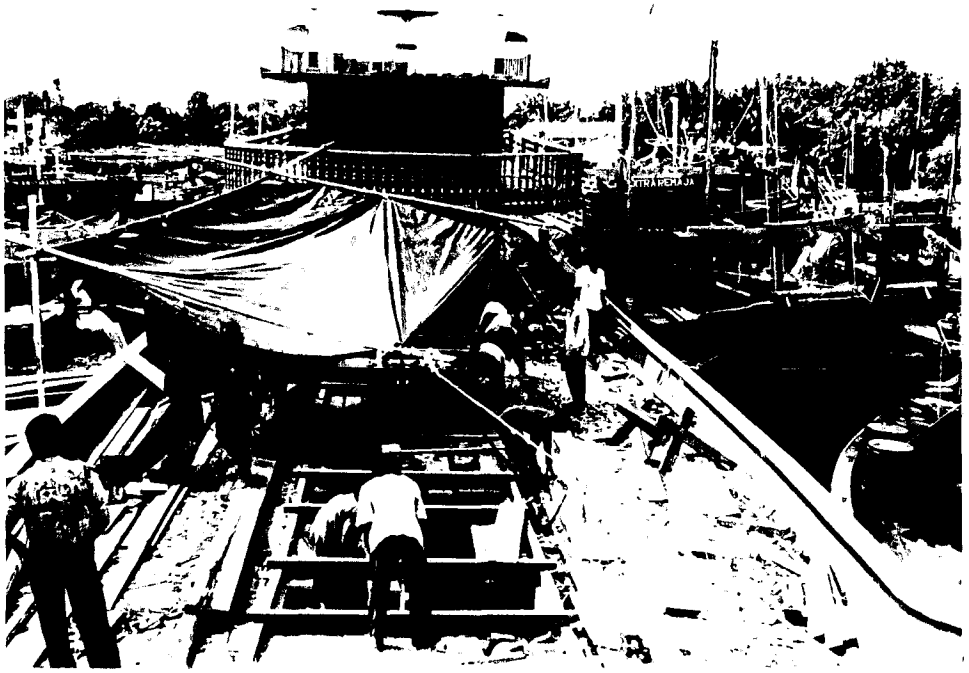
※ 日本漁船の場合、枝縄の間かくは40～45m
浮子縄から次の浮子縄までの間に15～20本
の枝縄がある。ワンセットの枝縄の本数(=
釣針の本数)は2000～2500本。
数ヶ所の浮子玉④にラジオブイを取付ける。

タルシウス第4号　インドネシアのまぐろ延縄漁業(1)　の語句訂正表

ページ番号	行番号	誤	正
35ページ	1行／2行／8行	漁種	魚種
35ページ	7行	漁艙スペース	魚艙スペース
35ページ	23行／24行	漁体	魚体
36ページ	46行	何十万トン	何十トン

バガン船。

これらの船は巻網漁船。
１９９３年－中部ジャワ、Pakalongang 漁港。



建造中のバガン船。

１９９３年－中部ジャワ、Pakalongang 漁港。

大岩勇と鰹節に見る南洋史の断片

藤林　泰

1. 大岩勇　南へ

「南へ！南へ！」という第1章で始まり、冷めかけていた南洋への関心を再び高めたと言われる竹越與三郎の『南国記』が出版されたのは1910年（明治43年）、大岩勇 8歳のときである。愛知県知多半島南端に近い漁村の船大工の三男として生まれた大岩が当時話題となったこの書を手にしたかどうかはわからない。だが、1914年（大正3年）のドイツ領南洋群島の占領、続いて1919年の委任統治領化をピークとして南洋への関心が昂揚する時代に青年期を送った大岩がその熱に突き動かされたとしても不思議ではない。

「大岩氏は愛知県豊浜の生れで本年32歳の若冠である。（中略）4年前裸一貫で裏南
洋からメナードに渡り造船所を始めたのが、事業の発端で現在は造船鉄工所の経営の外に貨物運搬業並に漁業を営んでいる。
（中略）土人との諒解が工合いよくついているから餌料に困ることはない。専属仲買があるから値良く売れる。労使が協調しているから問題が起こらぬ。自ら造船鉄工所を経営しているから船と機械の修繕は徹底する。土地の言葉に精通しているために良民との交渉が円滑に行く。
斯様な次第であるから此地では、彼が鰹漁業に成功しなければ成功する人は恐らくあるまい。
（中略）アンボイナに於ける原耕氏は創業未だ半ばならずして、突如彼地に客死した。其の後継者として吾人は大岩君に期待を持つ」

約3か月に渡ってサイパン、パラオ、蘭領東印度、フィリピン、香港を視察し、メナドでは大岩にインタビューをした木下辰雄は、その報告書「南洋視察の旅」（『水産界』1933年10-12月号、『海外漁業事情』南洋水産協会、1937年所収）で、大岩勇という人物をこのように絶賛している。

鹿児島県出身の医師であり漁業家であった原耕が3度目の南洋カツオ漁場調査の途上、アンボンで客死したのが 1932年（昭和7年）、大岩がビトゥンでカツオ漁を始めた時期に重なる。ビトゥン近海において原耕が第1回目のカツオ漁場調査に大成功をおさめた1927年の2年後、大岩はパラオ、テルナテを経てこの地に着き、メナドで造船所を開いている。すでに1920年ごろから得意の追い込み網を用いてスラウェシ周辺の沿岸で小魚を獲っていた沖縄漁民の水揚げがこの時期次第に減少していたことから、原耕の成果と大岩の資金と沖縄漁民の技術が結びついて、カツオ一本釣りを主体とした大岩漁業が発足する。

2. 大岩漁業の躍進と国策会社化

それまで北スラウェシにおける日本人のカツオ一本釣りは日蘭漁業（1929年、鹿児島県人によって設立されたカツオ・マグロ漁を専門とする漁業会社）とビジャック組合（沖縄漁民の組織で、カツオ漁と鮮魚販売を手がけた）の 2グループの手で行われていたが、ともに 1939年（昭和 14年）から 40年にかけて大岩漁業に吸収合併された。これは、カツオ漁、鮮魚販売、鰹節製造を手がけ、テルナテにも基地を置くなど順調に業績を伸ばしていった大岩の経営手腕もあるが、第 2次世界大戦開戦前夜、すでに水面下で進められていた日本軍の食糧確保のための機構整備という有無を言わさぬ力が働いたことも推測できる。事実、翌 41年（昭和16年） 5月、大岩漁業も南洋貿易会社の出資の下、東印度水産株式会社という新会社に組み込まれ、鮮魚・鰹節の海軍への納入を主たる事業とするようになる。

大岩は軍属ながら海軍大佐と同格の扱いを受け、地元日本人社会でも大きな発言力を持つ存在となっていたようだが、すでに日本の敗戦も間近に迫っていた。

事業の拡大で念願の自社船神奈川丸を手に入れた大岩は、横浜港を出港してビトゥンをめざした。だが、海軍から物資運搬を要請されたため中国を経由することになり、その途中の1945年5月20日、朝鮮半島釜山沖で爆撃により船は沈没し、死亡。43歳であった。

藤林　泰＜yfuji@msd.biglobe.ne.jp＞
Tel 048-881-3464　Fax 048-885-8841

3. 北スラウェシの鰹節製造の現在

戦後四半世紀を経た1970年ごろから再開された日本企業による鰹節製造の試みは、さまざまな企業と個人によって進められたがその多くは頓挫した。とは言え、北スラウェシ海域がカツオ漁の好漁場であることは原耕以来70年を経た今日も変わらず、カツオをめざす日本企業と日本人は絶えることがなかった。ようやく鰹節が比較的安定して出荷されるようになったのは90年代に入ってからのことである。

そして、大岩勇の足跡は思わぬ所に残されていた。現在、この地域で鰹節製造を行っている企業は6社(うち資金面、技術面で直接日本企業とつながりがあるのは4社)。地元華人資本の2社は姉弟が経営しており、彼らの父親がかつて大岩漁業で働いていたことが鰹節製造業を始めるきっかけになっている。

大岩には、サンギヘ人(メナドの北、フィリピン・ミンダナオ島に向かって点々と連なるサンギヘ諸島を中心に住む人びと)の妻との間に5人、華人の妻との間に2人の子供がいた。子や孫の中には、カツオ漁を営む者、漁船修理に従事する者、日本企業進出の斡旋を手伝う者、日系鰹節工場で働く者など、今も鰹節とのつながりの中で生計を立てている者も少なくない。

1998年、6社合計の鰹節生産高は約2800トン、日本の鰹節生産量およそ7万5000トンの4%程度に過ぎないが、技術の向上、品質管理も進み、今後の生産増が見込まれている。

南への関わりは、一個人のロマンと商売っ気、抗うことのできない国家の力、それを後押しする社会の風潮などが絡み合いながら70年の時を越えて脈々とつながっている。1920年代終わりから20年あまり、日本人、沖縄人、そして北スラウェシの人びとを巻き込んだカツオ・鰹節を梃子にした南へ向かうベクトルが、今、再び動き始めている。

(以上)

下痢止めは危険 まず水分補給剤を

国立感染症研究所
感染症情報センター 小坂　健

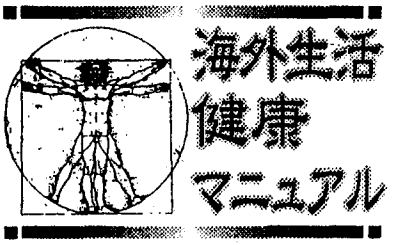
下痢の予防と治療

日本や諸外国で、最も患者数の多い食中毒はサルモネラ感染症です。その中でも卵や鶏肉などが原因となるサルモネラ・エンテリティディスが多くを占めています。卵の殻の外側についた菌が、調理のときなどに混入、室温に放置されると増殖します。はじめから卵の中に菌が入っていることもわずかながらあります。

サルモネラ感染症の予防のためには、新鮮な卵を買い新鮮なうちに調理し、すぐ食べることです。やむを得ず保存するときはなるべく低温で保存すること(8℃くらいが理想的。開け閉めを繰り返す冷蔵庫の戸の上段では少し心配。長くても3週間以内)。あとは十分に加熱することです。

ただ、最近も日本人旅行者が欧州のホテルで朝食にスクランブルエッグを食べてサルモネラ感染の集団発生を起こした事例がありました。卵は半熟くらいの方がおいしいし、においや味ではわからないので困った問題です。

激しい下痢を引き起こすものにコレラがあります。熱帯地域などでエビなどの甲殻類を食べるときはよく加熱すべきでしょう。コレラなどの病原体は、まず胃酸によって攻撃されますが、胃潰瘍などで胃酸を抑える薬を内服している人は病気にかかりやすく、注意が必要です。糖尿病や重い肝臓病などの人も、不用意な生食や加熱が十分でない食品の摂取は避けるべきでしょう。



下痢になった時心がけることは、水分の補給を十分に行う、下痢止めは基本的に使用しないということです。途上国で、急性下痢症の子供たちの生命を救うのは、高価な薬ではなくて水分の補給を行う経口補液塩(ORS)です。

下痢止めの使用は病原体の排出を遅れさせたり、ひどい場合には腸閉塞を起こしたりすることもあるので、最小限に抑えたいところです。小児や、カキの生食などで起こるウイルスが原因の下痢症には抗生物質は効かないばかりか、長期間の服用で腸内にある正常な細菌叢を壊し、抵抗性を弱めることもあるので使用には注意が必要です。

下痢の原因は、今回紹介した以外にも病原性大腸菌O(オー)−157をはじめとする細菌やウイルス、近年、日本やオーストラリアなどでも水道水からの感染で問題となったクリプトスポリジウムなどの原虫によるものもあります。血便が出たり、症状が長引いたりしたときにはすぐに医療機関を訪れる方がよいでしょう。

「レフォルマシ」の名の陰で

《『アジ研ワールドトレンド』５月号掲載》

松井 和久

レフォルマシ(改革)。これは、スハルトからハビビへの政権交代の起こった一九九八年五月以来、インドネシアの巷で最も頻繁に聞かれる言葉であり、スハルトが三〇年以上築き上げてきた「新秩序」という名の旧体制を打破し、新しいインドネシアを築いていくための行動を意味している。

レフォルマシでは、旧体制の象徴である言論統制、結社の制限、人権侵害等を正して民主化を進めることはもちろん、機会の公正を損なうKKN(癒着(コルシ)・汚職(コルプシ)・身びいき主義(ネポティズム))の是正が重要視される。

その意味で、ハビビ政権が実際に民主化のプロセスへ踏み出していることは事実として認められよう。たとえば、発禁措置が事実上なくなったことで、新刊の新聞、タブロイド、書籍、はては地下本の類まで書店に溢れている。この光景はジャカルタだけでなく地方でも見られる。政治犯の釈放も行なわれ、三月には一九六五年の九・三〇事件に連座して終身刑を受けたラティフ元大佐などの拘留者が釈放された。

しかし、一方でスハルト蓄財疑惑の解明を含むKKNの是正等については期待ほど進んでいない。言ってみれば、現政権を担う政治家や政府高官の生き残りに関わる部分は、レフォルマシから巧妙に外されたままになっている格好である。

●生き残りを図る人々

ハビビ現政権を支える政治家や政府高官の多くは以前、スハルトの忠実な下僕であった。もちろん、ハビビもまたその例外ではない。レフォルマシのかけ声とは裏腹に、「開発改革内閣」という名のスハルトなきスハルト体制はまだ温存されている。

政治家や政府高官は、自分の地位や権益を守るためにKKN是正の声をうまくかわさなければならない。彼らはスハルトと関わりのあった自分の過去を大っぴらに暴かれるのを怖れている。他方、自分が生き残るためには政敵を追い落とす必要もある。絶対的な権力者が去って自分の将来への不安と相互不信感が高まるなか、政治家や政府高官の間でそうした鞘当てと陰謀の限りが尽くされているのかもしれない。そして「こうした状況こそが昨今の暴動の頻発を招いている」と分析する識者も少なくない。

●動きの鈍い南スラウェシ州

当地スラウェシでのレフォルマシの動きは表面的で、中央政界よりもさらに鈍い。

南スラウェシ州では、昨年五月の政権交代当初、州都ウジュンパンダンから来た学生が州内の各県政府にデモをかけ、県長の辞任を要求した。県長の殆どは州知事のイエスマンであり、これは州知事への批判運動だった。これをかわすため、州知事側は二三県のうち二県の県長を解任する一方、KKN是正の名の下に、この機会を利用して自らの政敵である州書記を解任した。

今のところ、南スラウェシ州では、スハルト退陣以前の地方政体が温存されたままとなっている。来たる六月の総選挙後の不確実性を察知して、地方政体でのレフォルマシの動きはむしろ一段と鈍っている。

●ヌルディンへの無罪判決

生き残りを図っているのは、政治家や政府高官だけではない。スハルトの庇護に頼っていた実業家もまた、ハビビ政権へ擦り寄ることで自分を守ろうとしている。たとえば、ハビビ嫌いが顕著な華人系企業グループでは唯一、リッポー・グループがハビビに接近した。ハビビも反華人のイメージ改善のためにリッポーを利用している面がある。以下は、南スラウェシ州で無罪判決を受けたある実業家の話である。

南スラウェシ州地方裁判所は三月二二日、丁子流通に関わる汚職の容疑で訴えられていた同州村落協同組合連合会(PUSKUD)元会長のヌルディン・ハリッドに無罪の判決を下した。検察側が証拠不十分を理由として裁判所に無罪を申請したことがこの判決を決定した。

丁子流通は、価格安定を目的に一九九一年以降、スハルト前大統領の三男トミー率

いる丁子流通管理庁(BPPC)が独占してきた。丁子農家は村落協同組合(KUD)及びPUSKUDを通じてBPPCに丁子を売り、代金を得る仕組だが、その際に代金のうちの一定額を農民特別強制依託金(SWKP)としてPUSKUDに預けることになっていた。SWKPはいずれ農家に返還されるべきだが、それがなされず、PUSKUDの名の下にヌルディンが私的目的で着服した、とされたのである。丁子農民らの訴えではその額は約一一五〇億ルピアに上る。州検察庁はこの訴えを認め、ヌルディンの自宅や預金を差し押さえた。

SWKPはPUSKUDが出資するスーパー「ゴロー」ウジュンパンダン店の土地取得及び建設に当てられたが、これは協同組合大臣の許可を得ずに行なわれたといわれている。また、丁子農家に返還すべきSWKPの一部は、農家が所属するKUDから「ゴロー」への出資金として使われたことも指摘されている(ヌルディン側はそれを強制したことはないと反論)。

●裁判を巡る奇怪な出来事

この裁判を巡っては、奇怪な出来事が相次いだ。ヌルディンの裁判を担当した州検察庁長官が審議の途中で最高検察庁により突如解任された。同長官がヌルディンに賄賂を要求した、というヌルディン側の主張が受け入れられたものである。これに対して同長官側は、ヌルディンが賄賂を送って買収を図ったと逆に反論した。

その後の公判で、証人が次々に証書を取り下げたり、拒否したりした。銀行は預金者の秘密保護を理由にヌルディンの預金口座に関する情報の提供を拒否した。本判決の直前に最高検察庁から州検察庁に対して無罪判決を申請しないよう申し入れがあったが、無罪判決は結局「強行」された。

ヌルディンは、丁子流通でスハルト前大統領の三男トミーに接近し、PUSKUDを大きくした。ハビビ現政権の協同組合重視姿勢に乗って、昨年六月に流通協同組合(KDI)を結成、国内の食用油流通を一手に引き受けた。KDI設立にはアディ・サソノ協同組合大臣も尽力しており、政府与党ゴルカルの国会議員でもあるヌルディンは現政権の中枢とも太いパイプを持つ。

●レフォルマシへの遠い道

ヌルディンへの無罪判決を批判する学生らは、ウジュンパンダン市内で抗議行動を続けた。無罪判決を不服とする学生たちは路上でPUSKUDタクシー二台を焼いた。市内ではヌルディン支持者と学生との間で衝突があり、互いに投石が行なわれた。

ヌルディン支持者には、学生や協同組合関係者以外に、金銭によって動員されたならず者グループも含まれているといわれる。ヌルディンは、こうした支持者を容易に動かすことができるため、有罪判決となった場合には、ヌルディン側の報復が社会不安を起こす可能性が考えられた。また、ヌルディンは手下を使って批判グループの学生リーダーを拉致し、判決当日にデモを起こさないよう脅迫した疑いも出ている。

レフォルマシの名の陰で、地方でもヌルディンのような人物が策を労して生き残りを図っている。それは中央政界の政治家・政府高官の生き残り競争と密接に結びついている。一方それを批判する当地の学生もまた、冷静に対応せずに投石やタクシーへの放火といった破壊行動を起こしてしまう。大衆の共感を得るには、こうした学生自身のレフォルマシも必要だとはいえまいか。

六月に総選挙が行なわれたとしても、レフォルマシへの道はまだまだ遠い。

==========
MATSUI Kazuhisa / JICA Expert
Hand Phone: +62-811-41-5761
E-Mail: matsui@upandang.wasantara.net.id
==========

アンボンからのブトン人

松井 和久

4月28日～5月5日にかけての南東スラウェシ州への出張の機会を利用して、南東スラウェシ州ブトン県におけるアンボンからの避難民の状況を見てきた。

彼らは、ブトン島及びその周辺からアンボンに渡ったブトン人の五世・六世にあたり、アンボンで生まれ、アンボンで育ち、アンボン語を操る人々である。ブトン人のアンボンへの移住の歴史は古く、その昔、ポルトガル人がマルク諸島へ攻め入ってきたときに、彼らを追い出すのにブトン人は大いなる貢献をしたと言われている(その結果、ポルトガルはティモール島の東半分に追いやられたという)。

かつてアンボンへ移住したブトン人は、ブトン島南部及びその周辺の島々の出身者である。ブトン島南部及びその周辺の島々の土地は痩せており、農業を行なうには厳しい環境であった。同じブトン県でも、総合経済開発地域(Kapet)に指定されたブカリ地区(南東スラウェシ半島の南西部)は土地が比較的肥沃で、そこの出身者の家族でアンボンから避難して来た者はほとんどいない。換言すれば、アンボンからの避難民は、彼らが本来アンボンへ移る動機であった人口受容力の低い厳しい環境の土地へ舞い戻らざるを得なかったのである。

ブトン県開発企画局は、これら避難民に対してインタビュー調査を行ない、その個票をもとにした詳細なデータを持っている。避難民の今後の職業やアンボンへの帰任の意志の有無を確認し、個々の避難民ごとに適切なプログラムへ誘導させるためのデータである。これによると、4月末現在、避難民の総数は4万1704人(9666世帯)であり、県内の18の郡(Kecamatan)に分散して収容されている。それらのなかには、島嶼部に収容されている避難民もいる。また、前述のように、五世・六世である避難民とブトン県に残った家族との関係が希薄なため、避難民の先祖の出身地に関係なく各地に分散・収容されているのが現実である。

今回は、ブトン県開発企画局職員とともに、県庁所在地のバウバウ市内の共同避難所2カ所とバウバウから南部へ車で約一時間半のバタウガ郡に暮らす避難民の様子を見てきた。

5月1日、最初に訪れたのは、バウバウ市内のスタジアムで、アンボンからの避難民が先ず最初に収容された場所であった。避難民が収容された後の雨季の影響で、スタジアムに水が溢れ、避難民が滞在できる状況ではなくなったため、避難民は各地へ移された。一時、避難民は全くいなくなったが、現在は、マルク州南東マルク県トゥアルから避難して来たブトン人27世帯が固まって生活していた。彼らがそこで暮らし始めて約3週間になる。

次に訪れたのは、市内のムスリミン孤児院である。ここの二階に先祖が鍛冶屋列島(トゥカン・ブシ諸島。最近当地ではワカトビ諸島という地名のほうが一般的である。すなわち、ブトン島の南東に連なるワンギワンギ島、カレドゥパ島、トミヤ島、ビノンコ島及びそれら諸島の周辺を指す)出身のブトン人避難民69世帯が共同生活していた。彼らはアンボン及びセラム島からの避難民である。すでに約3カ月間生活している。彼らの代表によると、米は一日にわずか一人当り100グラムしか配給されず、それとありあわせの野菜とを食べて何とかしのいでいるという。とくに、乳幼児用の粉ミルクはこれまでに全く手に入っていないとのことだった。ここで産まれた乳児がいた。

5月2日、今度はバタウガ郡の避難民の様子を見に出かけた。バタウガ郡では現在、アンボンからの避難民5957人(1268世帯)が21村に分散して居住している。避難民のための共同避難所はラオンポ村集会所及び警察寄宿舎の二カ所あり、一カ所につき約100人が収容されている。このほか、政府所有の建物、たとえば村長など役人用の官舎にそれぞれ4～5世帯ずつ収容されている。それらの官舎は、役人がバウバウから通うので、空家になっていたものである。

避難民のなかには、手に何も持たずに着の身着のままで逃げてきた人々や孤児もいた。ある官舎では9家族がすでに3カ月間共同生活しており、乳幼児が8人もいて、うち半数が病気であった。米、塩、乳幼児用のミルク、医薬品、いずれも援助されたことはあるが、絶対量が足りない。しかし、地元民もまた貧しい。郡長によると、避難民用に一カ月に100キロの米が届いたというだけで、地元民はうらやましがると言う。

避難民はただ待っているだけではない。当地に着いてほどなく現金収入の機会を作り始めている。たとえば、ちょっとした菓子やキャッサバを固めて餅にしたカオピ(アンボン語ではゲッペと呼ばれる)などを作って声を張り上げて売り歩いている避難民がいる(地元の売り子は声を張り上げたりしないそうである)。そうした避難民の状況を察して、郡政府は定期市を4日おきから2日おき、現在では毎日開かせている。

また、避難民のなかには、ありあわせの木材を使って自分たちで家を建て始めた者もいる。郡政府は彼らの試みを支援するため、県政府の指示を待たずに地元民に対して土地の無償提供を求めたり(地元民は避難民になかなか土地を提供したがらないという)、建築資材としての木材の切り出しの許可を避難民に与えたりしている。郡政府及び村政府は、この機会に眠っている土地の活用を促している。一方、漁民出身の避難民のなかには、サンパンと呼ばれる小舟を作り始めて漁に出る準備をしている者もいる。避難民には塗装工、機械工、船大工といった熟練工が多く、自分たちで工夫していろいろ試みている。道具さえあれば、彼らは自分たちで事業をよりスムーズに始めることができるため、農民に対しては農具を、漁民に対しては漁具を提供する必要がいわれた。郡政府や村政府は、彼ら避難民の存在を、停滞している地域の開発の主役としても期待しているのである。

アンボンからの避難民に対してなすべき支援は、短期的な観点と長期的な観点とから考える必要がある。ブトン県開発企画局のデータによれば、4月末現在で99人の避難民がアンボンへ戻ったとのことだが、ほとんどの避難民はいまだアンボン暴動のトラウマ状態にあり、アンボンに戻ることを考えていない。家も資産もすべて燃やされてしまった記憶が生々しく残っている。もしも総選挙を経てインドネシアの政治状況が安定し、経済の回復基調がはっきりしてくれば、いずれは土地の痩せたブトンの地から再びアンボンへ戻ろうとする避難民も出てくるだろう。一方、トラウマ状態から抜け出せずに困難を覚悟でブトンに留まり続ける避難民もいることだろう。そうした避難民に対しては、農業により適した土地への移住を促すことが考えられている。ブトン県政府は、避難民の苦しい状況は最低でも向こう一年間は続くと見て、この一年間の避難民に対するケアをどのように行なっていくかを最大の課題と考えている。

緊急に必要な支援は、避難民のための仮設住宅建設と食糧などの必需物資の確保であろう。仮設住宅の建設では、移住省が避難民の移住と組み合わせて計500戸の仮設住宅の建設を行なうほか、社会省も同様に300戸、公共事業省住環境総局(チプタ・カルヤ)も1000戸の仮設住宅建設を計画している。移住省の仮設住宅は5メートル四方で、建設費用は一戸当りわずか150万ルピアの超簡素住宅であり、住宅建設の労働力として避難民を雇用して賃金を支払い、完成後は当該避難民が入居する仕組みになっている。社会省の仮設住宅建設も同様のコンセプトである。これらに県政府公務員組合の奉仕事業によって建設された80戸を加えて、現在までに計1880戸の仮設住宅建設が予定されている。しかし、一般民家ではなく共同避難所に収容されている避難民は計4109世帯あり、仮設住宅の絶対数が足りない状況である。移住省はさらに1000戸の建設を予定しているが、それができても約1000戸以上の住宅が不足する計算である。家族としての様々な営みを行なうためにも、住宅建設が必要である。県政府によれば、仮設住宅建設に加えて、生計の糧を得られるようにと、農業を行なう者には耕地を提供し、漁業を行なう者には漁具(船、網)を提供したり海草栽培の指導を行なったりするプログラムを組み合わせる予定である。

食糧などの必需物資の安定供給も緊要である。とりわけ、多くの乳幼児が栄養不良から病気になっており、彼らに対する粉ミルクの供給や副食物の提供を早急に実施する必要がある。また、米の供給も一人当り一日100グラムしか与えられていない状況にあり、絶対量が不足している。砂糖、塩、食用油などのほか、石鹸、衣類なども必要である。これらの必需物資の供給に関しては、一回限りの配給ではなく、向こう一年間を見越しながらの継続的な支援が必要になってこよう。

＊コソボ問題が世界的に注目を集めていますが、このアンボンからのブトン人避難民に対して、我々も何らかの支援をすべきではないかと考えています。すぐに思いつくのは、募金を募って米や粉ミルクなどの必需物資を避難民に供与することだと思います。住宅建設などで政府開発援助の担える部分もあるのではないかとも思います。向こう一年は続くこうした状況に対して支援をどのように進めていけばいいか、いろいろアイディアをご教示いただければ幸いです。

在ウジュンパンダン

MATSUI Kazuhisa / JICA Expert
Hand Phone: +62-811-41-5761
E-Mail: matsui@upandang.wasantara.net.id

O, Ina ni Keke ちょっと お嬢さん

--- マナドで唄って ---

庵 浪人

蘭の花びら

インドネシア通の人たちから「メナドに行かれましたか」といつも聞かれた
まだですと答えると、やや残念そうに、「いちど行かれたらいいです」。

そこは素晴らしい景観であり、住む人々であり、なにより当国一の美人の誉れ高い地方と賛辞がつけば興味も倍加する。

いつかはと機会を窺がいながらも叶えられないのは、マナドは遠い地なのだ。
愉しみはあとになる程多くなると言い訳をして、メナドを思う日が過ぎていった。

地図を見ると巨大なインドネシア列島のほぼ中央に、奇妙な“K”の字を呈して横たわるスラウエシ大島。

南海の蘭の花びらとは裏腹に峻険な山々が四方に半島を突出させて、天地創造の日神はこの地を創り給い、それぞれの岬を伝いそれぞれの国を目指せと命じ、人は世界に散っていったとする椰子の茎に記されたブギス・ロンタル伝説があるのも肯けるその姿だ。

神はいまだ確たる信念もないまま火山を怒らせ川の流れを変え、島を沈める。
それだけでも空想を掻き立てられるが、メナドは島の北、西から東に鶴の首のように連なる長大な岬の先端に位置する北スラウエシ州ミナハサ県の首都である。
この海の回廊は幅僅か2~30㌔で700キロもの長さは多分世界最長の岬だろう。

ミナハサ ― みなさま ―

北のミナハサはクリスチャンが多く、なにやら女性的だ。
多様性の中での調和が国是のインドネシア共和国の首都ジャカルタはその見本市の観があり、多くの外領人が住み分けるが、街のメナド人は多数派のジャワ、スンダ人やスマトラの人達とやや趣きを異にすると感じるのは好奇心ばかりではない。

この国の衣装のサロン腰布を巻きたがらない。男はペチ(イスラム帽)でなくソフト帽子を愛用し、日曜日には着飾ってグレジャ(教会)に行き、オランダ語や英語を日常語にしてマレー語（インドネシア国語）を使いたがらない。
確かにマナド人はそれなりの教養で違和感が少ないし、車曳きのような賤職につかない。
ジャワ人のように、妙にへりくだった慇懃無礼さも、スマトラ・バタック人の野卑ともいえる闊達さもない。

その時代、オランダ植民が最も成功した地域で、統治の中間職に多用され、当時住民二千人にひとつの学校があった。ジャワの五万人にひとつでは比較にならない。自分達はオランダ 第12番目の州を自認していた。

いまでこそ東北の辺境と思いがちだが、列強が命を張って権益を争ったスパイス争奪の拠点だったし、否、それより遥か昔の唐、宗の南海交易の中継地として栄えた地なのだ。ここの人達に強いモンゴロイド、コーカソイドの血の混合が認められるのもその紛れも無い証拠だ。ムステイーソ(混血)には神の悪戯で、驚くほどの美形が生まれる。
ジャワ人などが、メナド人は派手好きお祭り好きのラマイ・ラメイアン浪費家で身上を潰すと軽蔑するが、それが出来る土地柄なのだろう。

そんな国への最後の干渉が日本軍だった。
ダバオを飛び立った空の神兵が、大空に花と咲いて降下して三年程軍政がひかれたが、共和

国の中で戦争混血児が最も多い。そして半世紀、なんの違和感もなく同化しているのもこの地域の歴史所産なのだろう。

わけ知りの友人が、「メナドは港、ミナハサは皆様、ゴロンタロは五郎太郎、浦島太郎の龍宮城と乙姫様はあそこなんだよ」古い日本人はなぜかメナドが好きなのだ。

教員養成学校

或る同窓会に招かれた。

『 REUNI III EXSISWA MINAHASA 1942-45 』　戦中の日本職業学校卒業生の集まりだった。

舞台に不自然な字体で‘中’と書かれた周囲を KYOOINYOOSEISHO　SIHANGAKKOU の文字が囲んだ幔幕が張られ、定刻 ,「気を付けい！」　「整列！ 番号！」

「イチ、ニ、サン、、、、十五、欠！」　どきもを抜かれる。

♪　見よ東海の空あけて、旭日高く輝けば、、♪

白髪の老男女が唄う正確な日本軍歌で幕が開いた。

♪ 藍より蒼き大空に、真白き薔薇の花模様、見よ落下傘空を往く、、 ♪

老人は得意気に、「儂はそれを下から見上げていたものさ」

♪ 桃太郎さん、お腰につけたキビ団子、ひとつください 供しましょ ♪

この夜は歴史が止まっていた。

「Tuan Anu！ Mari Menyani Dulu Jo,　Lagu Asli Jepang！ 日本の方 本場物唄って！」

突き出されるように一段上に連行されても、咄嗟のことで思いつかない、、。

♪ 海ゆかば 水くかばね、山ゆかば、苔むす屍、

大君の辺にこそ死なめ、 かえりみはせじ、、♪

場違いな歌に、なんとぴったりとハーモニイしてバックコーラスをつけてくる。

正直ある種の感動を覚えた。

拍手が鳴り止まないうちに、目が合った前の席のお嬢さんに笑いかけてから手を取って、

「 Sekali Lagi Mencobalah Lagu Terkenal O Inaki keke,　Ayo Tolong Bantu Yah

あの有名な オ、イナニケケやってみるから 援けて、、」

♪　O Inaki Keke Mange Wisako　　やあ、お嬢さん 何処行くの

Mangewa ki Wenang tu males waleko,　　マナドの町へ菓子買いに、

Waene, Waene Waene Toyo,　　ちょうだい、ちょうだい すこしだけ、

Daimo siapa ko tare Makiwe,　もうないよ、もうないと言ってるのに、まだ欲しがるの ♪

インドネシアにはそれぞれの地方にそれぞれの言葉で唄われる歌が数多くある。

それらのなかの名曲は中央で知名され、国民歌的な地位を得る曲もでる。

ミナハサのこの曲は、Lagu Daerah（地方歌）の白眉で、国民愛唱歌にもなっている。

ゆったりと柔らかいテンポ、デユエットするにはうってつけのこの歌で会場は大いに盛り上がった。私はまだ見ぬマナドの港に下る大木並木の坂道を想像した。

歌は僅か数行に多くの情感が詰まっている。 これこそマナドだろう。

少女がはにかみながら駆け下るその坂道を、、。

老人のお孫さんか、黒真珠の瞳の娘さんの唄うスローテンポ ミナハサ民謡、

Esa Mokan　　Ｏｎｌｙ Ｙｏｕ

はじめて聴く歌の意味はわからないけれど、お菓子を舐めていた少女は、長い黒髪を揺らし男を悩ます女神になって、紺碧の渚を背景に裳裾をたくしあげて婉然と微笑む、、、。

その週のうちに私はマナド行きのエアチケットを買った。

箱庭の岬

朝早くジャカルタを飛び立ったフォッカー１００は、茶色く濁った水を海に吐き出すジャワ海を東へ四時間、エルロンを下げればそこには、蒼すぎる海にメナド富士が乳房のように浮かび、クラバット、ロコンの山裾の緑の絨毯のなかに、白い家並みが湾を囲むように広がっていた。窓に納まる可愛いい箱庭のような眺めだった。

スコールが去ってエプロンは黒く濡れ、椰子の林を渉る風は、どんよりと重いジャカルタの大気とは違うすがすがしさだ。
風の香り、それに乗る話し言葉にも乗合バスの形もジャワとの距離を感じる。
独立の英雄の名を冠したサム・ラトランギ空港。メナド人ぜんぶがオランダの犬だったわけではない。

ゴルフ場を右に見ながら長い緑の下り坂を半時間も走ると街の喧騒に包まれる。
小さい中央広場を囲む繁華街から耳を聾する流行歌が流れる割にはノンクロン(ぶらぶら歩き)は少ない。

マナド市周辺で二十万人、ミナハサの人口密度はジャワの半分以下の三百人のせいでもなく、石油時代になって経済はスマトラやそれを牛耳る首都に移って、往年の富有県もチェンケ価格の暴落、コプラ脂も低迷してただの地方都市に転落、やや停滞が感じられるようにみえる。
海岸に沿ってサム・ラトランギ大通りが長く続き、ミニバスがワンウエイをじゅずつなぎで走っているが、セダンやトラックの姿は稀だ。

どこも独立英雄サム・ラトランギが巾を利かせる。そろそろ新しい英雄が必要なのではないか。

最初のひと晩は、その街の名のあるホテルに泊まることにしている。
街のグレードがそれでわかるから。
カワヌアホテルのロビイもプールも閑散としていて、ジャカルタ資本チエンに組み入れられたのも肯ける。
ロビイでは三十年前のキングコールが、ユアロンリイ ミステイックスマイル あなたの神秘的な微笑みとモナリザを唄っていたから、私もジャパニーズ神秘的な微笑みを浮かべてマンハッタンでもと思ったが、ボトルストックとバーテンダーの手元を見て、ただのジントニックにした。

バンドにむかってグラスを上げると、一気にハッピイソング(上を向いて歩こう)、私へのウエルカムソングに変更した。
左隅に白髪(メナド人には実に多い)赤シャツの骨太が、子分に囲まれて密談を交わしているほか客はいなかった。

ギターがお出ましになり、「スラマットダタン、ようこそマナドへ」
世界共通の仕来たりで、札を縦折りに挟んでやってから一曲所望。
はるばると来たのだから黒真珠を想って民謡エサ・モカンを。 ESA MOKAN あなただけ

Esa mokan genangku wianiko, Tia mo marua rua genang e karia,
Mangalei ngalei uman wia si Op.Wailan, Pakatuan pakalawiran wiani ko,

でぶのギター弾きは、リクエスト曲にか札にかわからないが、顔中で満足して、身体に似合わずアルペシオで16拍子にのったスローテンポで唄いはじめたから、私はやっとメナド

にいるのを実感した。赤シャツが親指を突き出しながら近ずいてきて、
「日本人か？」「まあ」　「なんのプロジェクトか」「サイトシーイング」
「日本人はひとりではカンコーしない」　「まあな」
「自動車か、リゾートか？」　「考え中だ」「わしは役にたてる。知事は親戚だ」
シャツと同じ赤い紙に金色の字の名詞を呉れた。支那寺にいる狛犬に似た色と顔だった。
こんな小さい町では誰でもおおかたは親類同士だろう。
この国での定理がある。はじめは簡単、何事も可能で出来ないことはない。実際に始まると、何故か止めどもない困難と不運がやってきて、挙げ句にスサ(難しい)、最後はナシブ(運命)、アパボレブアット(しょうがない)、インシャーアルラー（神のご加護を）。
今朝は友人アリがミナハサハイランド観光ドライブに誘ってくれる。
初対面で「クリスチャン国メナドでアリとは珍しい」イスラムの ALI と思ったら違い Ary だった。なにかのスポーツで舌を軟らかくしない限り識別できない。
海岸から道はすぐ登りになり、巨木の並木道の両側に古い屋敷が続いて、往年の恵まれたコロニアルシテイの片鱗を覗かせる。
どこかから歌のオ、イナニのケケ（娘）が飛び出してくるような坂道。住人達は毎朝あの沖に浮かぶマナドトウア(メナド富士)を眺めながらコーヒーを飲むのか。
街に近いロコン(1580m)はときどき噴煙をあげ空港を閉鎖させる。
マハウ(1311m)も活火山だがまだ十*m走っただけ。人々は火山と共存している。
八百メートル登れば八度気温が下がるから、見晴台のあるテイノールは２０度、汗がすっと引く。ダイビングスポットとして世界的ドロップオフを持つブナケン、マンテハゲ、マナドトウアのコバルトブルーの海が俯瞰され、これで白い帆船が浮かべば一服の絵は完成する。
少し汚れたセイルを垂らしたランボ舟が額の左端に止まっていた。
箱庭でもこうも上手くは作れない。

大学の町、花の町トモホン。メナド美人の産地トモホン。
路の両側に花が咲き乱れ、私は身を乗り出して花より団子を探した。行き交う馬車も見慣れた痩せ馬ではなくむっちりした尻を振り、鈴を鳴らすのを追い越してゆくが、アリイのガイドにも耳をかさねばならず忙しい。
「チェンケブームの頃、この辺は成り金が続出して、電気もないのにＧＥの冷蔵庫を家に飾ったり、スハルト大統領のＸＸ息子がマナド美人に岡惚れして、外堀を埋めるようにチェンケ協会会長になった頃からこのザマです。キロ一万四千がたったの二千三百じゃあ」。
カワンコアンの高原の村村を過ぎ、誰でも一度は訪れるワトウピナペテガンの霊場に行く。
キリストが入る前のアニミズムで、不気味な黒光りする巨石に強大な霊験があるとゆう。
長く見捨てられていたが、或る貧相な小男が突然とロットレ(数字合わせ富籤)を当てだし、それを元手にマカオの胴元を破産させ、自分の死期も予言して、儲けた不浄の金を教会に寄付しその日に死んだが、それがこの霊石のお告げとゆうことで一時は国中の話題を独占した。
まだ三十年経っていない出来事だ。霊石は国家予算で堂が建てられ、スハルトも今を時めくパレパレ出身のハビビ大臣も、国の行く末を占ってもらうとゆう。
天皇や総理が伊勢神宮に参詣する文化国日本だから、馬鹿げているとは言わなかったし私も日本流に手を合わせた。巨石にはどっしりした存在感があり、痩せこけたキリスト様より奇跡を起こしそうに見えた。

火山岬には至る所に温泉が湧いている。
入浴の習慣がないから昔負傷兵治療に日本軍が作ったとゆうサルファ浴場は、湯元の熱湯を緩い階段状の斜面から長屋風の湯小屋に導いている。

兵士の急所が、痛くもなく溶けて無くなるスラウエシ名物の蝋燭病にも効くといわれたが、私は握って確認しただけで入るのは止めた。
ランゴワンから左に折れて、広い稲田の先にトンダノ湖(水面標高６００㍍４６ヘクタール)があらわれる。
落下傘部隊が降下したのはこの辺で、対岸のカカスには水上機桟橋が残っている。
珊瑚礁の島々から高原の湖まで小一時間、花が咲き温泉が湧き、涼風と美人なら、もう霊石に祈らなくても観光ポテンシャルならトップクラス。エイゴも通じるし、祭り好きはバリ以上だ。
ガルーダ直行便が日本から飛べばそれで決まり、最も近いインドネシアとなって、ここも「センエン、ヤスイヨ」の声が聞かれるように変わるだろう。
昼はエソニックフーズと、そんな雰囲気のある店に入った。メナド人は蝙蝠から犬、鼠までが好物と聞いていたが、現実にテーブルにはわけのわからない黒い塊があった。 裏庭にはシェパードや狆ころの頭蓋骨が転がっているのか。
「鼠といってもどぶ鼠じゃあなく、特別な木の上にしか住まない奴で、子供達のいい小遣い稼ぎです。蝙蝠は猫程もある大きいのですが、いまはもう祭りとか伝統行事以外余り食べなくなりました。スーパーもあるし」「どうだか」
何を食べてもいい。地域と場所により人間の食い物は多彩だ。だから地球の果てまで拡散したのだ。むしろ何処にでもケンタッキイとかマクドナルドのある方が奇妙だ。
目の前に広がる湖は松を配した小島を浮かべ、静かにさざ波をたてていた。
小舟が近ずき店の亭主に渡したものはシラスのような小魚で、口にいれるとまだむずむずと生きていたが美味だった。わさび醤油があればなあ。
遥かにクラバット山が霞んでいた。周辺はタンココ・バトウアングス(焼け石)、ドウアスダラ(兄弟)自然保護区の熱帯雨林で、鼠や蝙蝠じゃあなく、世界最小猿タルシウス、最小牛アヌア、有袋類クスクスや身体の三分の一もの大きさの卵を生むマレオ鳥がいる。
ウオーレスがたまげた土地だ。ナチュラリストなら引っ越した方がいい。
湖のドレインはトンダノ町で、そこに小さい滝もあり僅かを流れてマナド湾に注ぐ。
俺達は別と威張るトンダノ人に相応しい誰かの英雄像が、小さいロータリーに睨みを利かせていた。 この国では殆どお目にかかれないコーヒーショップの看板にちゃんとCaffeeと書かれ、旦那衆がテレビサッカーに夢中になっていた。まだ実利社会のインドネシアでは、満腹感もない喫茶店とか、景色を見る観光などの時代ではないから、私にとっては意外な光景に映った。
私がこの国で初めて知り合った男はルンバヤンとゆうトンダノ人で、生活はどうあれ、噂の如く自信にあふれ高慢だったし、カウナン氏も、昨夜会った赤シャツ氏のように骨太白髪の贅沢好きで、「国に帰れば働くことなぞない。安楽椅子に坐ってサンギール人が落とす椰子の実を勘定してればいいのさ」とうそぶいていた。
こうゆう手合いとジョイントすると私がサンギール人になりかねない。
サンギール・タラウドは岬の北にある群島で、インド移民が多い出稼ぎ族だが、その勤勉さでいまでは旦那の地位を脅かしているらしい。世の中はいつまでも同じではない。

美しい風景もいいが、当国一の美人天国は何処なのだ。
まだはやいからちょっと寄り道してトンスエの知り合いに寄らせてください、とアリイが言った。
トンスエ村はカウナンが囁いた極め付きがいる村として有名で、覚えていた。アリイの知り合いは郡長で、テイコアル家は名門だからトンスエにいるべきものがいるはずだ。
乙姫様とか。 純血アラブ馬の競り市前のような期待感が高まる。

車は予想に反して高床式トラデイショナルハウスではなく、普通の煉瓦壁の家に着いた。アリイのように背が高く、色は褐色だが彫りの深い初老の紳士が慇懃にオランダ語らしい挨拶をする。挨拶なら何語でも同じ、にっこり微笑めば万国共通、明らかなコーカソイドの血が何代か前に移入している。初めの話題は誰でもが日本人の話しになるもので、木村中尉がこの家に泊まったとか斎藤曹長殿を知っているかとか。
うわのそらで聞き流しているのはやましい気持ちがあるからで、壁の調度品やその横の貧相なイエス様の額に目が移り落着かない。
ショッキングピンクのポンチのグラスを盆に、同じ色のワンピースを召したミストンスエがお出ましになった。
「マーガレット、マルガリッテ。リチェって呼ばれています」
私は神の采配をうたがった。蝶より蛾に近いから。 マーガレットってどんな花だっけ。正確な発音は長くアムステルダムとイーストコーストに暮らしたからで、それで婚期も失したらしい。きっとまだ蝶になっていないのだ。
しかし彼女の会話は一級品で、人は見たくれだけではない。
緊張して汗がでた。芸術品は維持費も嵩む。特に虚栄心のトンダノ美人なら。
天は二物を与えず、龍宮城ではなかったが、再会を約してオランダ館を辞した。

夕日の残照があった。 海と山、町と港、峠と湖、紫外線も涼風もミナハサは、客人を恍惚とさせる、小人国に踏み込んだガリバーになった気持ちにさせる、まさに箱庭だ。
涼風を求めて庶民が海岸通りに出始める時間になっていた。
屋台がとうもろこしや氷菓子を売り、サイクリング部隊が嬌声をあげて通り過ぎていった。漁り火が瞬き、マナド富士は紫の闇に消えていた。
美人国マナドに来て景色が美しかっただけじゃ男がすたる。 シャワーを浴びてコロンを多めに振りかけて夜の町に出陣といくか。 職業学校同窓会の整列、番号！ に加えて突撃！。昼の倍以上のボリュームでこれでもかと流行歌を流し客寄せをする商店で、スピーカーよりでかい声で、「ラグダエラのテープはありますか」 「？」 「マナドの歌だよ！」
「ここみんなそうよ！」
ジャカルタからはるばる仕入れたらしいロック、ダンドウット。 それを地元の流しが真似たハイテンポの騒音音楽。
この騒音のなかでイメージした優雅なマナドを捜すには忍耐が要る。
とにかく適当に、トップシンガーらしい双子のテイエールマンシスターズ、 エルミイ・クリット、メナド美人オンナ・シンガルのポップミナハサ、女なのはわかる、それが名前なのだろうが。
やや貧相なギタートリオのカレオンスラタングループなどを選んでそうそうに店をでる。
華人系とみられる繁華街のホテルのデイスコはすさまじい。 いくら不景気だからといってラグビイじゃあないんだ。客引き争奪戦。 スラバヤかアンボンあたりの出稼ぎお譲さん達に両腕を押さえられて罪人のように連れ込まれた中はサイケなストロボがきらめいて、これでもかの音響、小心者は萎縮しちゃう。 真っ赤な口紅が、大昔この岬にもあったカルバニズム（食人習慣）に見えてくる。
ほうほうの体で宿に帰り、もういちど水をかぶって買ってきたテープを聴いてみた。
壊れ易い小さい箱庭のこの街は、進取の精神か新しもの好きなのか中央に汚染されてミナハサオリジナルには程遠く、 長いことはないなあと思わずにはいられない。
郷土芸能のご本家バリの人口も、あの寄せ付けないような農耕封建社会もここにはない。
浮薄ともいえる開放は、早晩此処を西欧的にかジャカルタ的にかにしてしまうだろう。
それはただの真似なのがわからない。 オランダ第十二番目の州と錯覚しても所詮ミナハサ

人なのを昔の苦い歴史が教えたのでしょ。

木の実ウクレレ

宿変えして、名前も定かでないロスメン（旅篭）にはいる。
プライバシイとかっこつけて、監獄部屋で孤閨を囲うより、屋根の下の人とはすぐ知り合いになれるこういったアトホームな安宿が好きだ。 すもう取りが似合う腋臭の強いオランダ娘、何を考えてるのか無口なドイツ、腕にちゃちなタトー（入れ墨）オージーダイバー、それぞれ旗を掲げたら愉快だろうなと黄色の私はレセプションをぐるりとひと眺めした。

カウンタの横の埃だらけのショーケースに、色が飛んだ絵葉書と T シャツなど、負けずに埃だらけのウクレレみたいな弦楽器が転がっている。
「これは売り物かい」
気の無さそうにカウンタ越しに女事務員が振り向き、奥から主人が出てきた。
埃を払ったので思わず顔をそむけたいほどだ。 「で、いくらだい？」
「そうさな、手造りだから、、。 ま、五万ならいいよ」 ボロンと鳴らしながら言った。
それは何かの木の実を輪切りにした共鳴胴に四本の弦が張られていた。
民芸品楽器で二千円は安すぎる、と一瞬算定したが、おくびにも出さず、「ずいぶんの値だね、シンガポールじゃおんなじ物が二万もしない」
この国で教えられた値切り作戦、技術供与とでも言うのか。
「じゃあそこで買えばいいじゃないか」 「埃だらけで可哀相だから聞いただけだよ」
「まあ、遠い処から来たんだから記念にしな、三万払いな」可愛い楽器は私のものになった。
「買ったんだから弾いてみてよ」
「いや、実は弾けないんだ。これから習うまで飾っておく」
「ジャパンは変ってるな、弾けもしない楽器を買うなんてさ」
やりとりをドアの陰で聞いていたのか、ドアボーイの兄ちゃんがにじり寄ってきて眉を上下に動かして合図を送ってきたから、 「ホラ、弾けるならやってみな」 と渡してやった。
兄ちゃんは調弦ももどかしそうに、ボロンがポロンに変わったとみるや、私の知らない地歌を奏ではじめたではないか。 ロビーは即座にライヴハウスに早変わり。
♪ **Indonesia Tanah Air Beta, Pusaka Abadi Nan Jaya,**
インドネシア 吾がふるさと、永久なるこの国よ、
我を生みし地よ、我を育てし地よ、吾が老いを見守り、吾が眠る地よ、♪
パチパチ、パチ、、。「この若い衆を、数日私に貸さんかね、 言い値でいいから」
契約はすぐ成立して、兄ちゃんは私のカメラを首に鞄を手に、楽器を抱えてついてくる。
料金？ それは聞かないで。 お兄ちゃんの名誉の為に。

ボランモンゴンドウ

ブナケンで潜らずしてダイビングを語るなかれ。マナドに行ったと人にも言えないだろう。が、つい昨日まで、マナド湾にスキューバなど持ち込んで自然を愛でる変人はいなかった。魚は欲しいだけ獲れるし、人々は、馬鹿げた遊びは疲れるだけだとゆう日を生きている。

アメリカ留学を終えたドクトル・バトウナ(現在ムーレックスダイビング主宰)が故郷の海を覗いてから、その垂直に切り立つ雄大なドロップアウトで一躍世界に躍り出たのがブナケンリーフだ。

望まれるすべての条件が揃っているとゆう。当たり前だ、此処はウオーレス卿レコメンドの国なのだ。アリイは何もブナケンだけじゃあなく、まわり海の全部がそうですと言うのは当を得ている。岬にはミステリアスとも言える湾や入り江や小島が続いていて、地図を見るだけでぞぐぞぐする。

車は町を出てタシクリアの浜辺から、入れ物だけ造って中身がないようなこけおどしのマナド・ビーチホテルを右手に見る。
砂浜もプライベートビーチと名前を変えて金網でかこって貧乏人とナントカ入るべからず。
そして自分達も金網の中に囲われてしまったのに気付かない。
がらんとして、客より従業員のほうが多いコーヒーショップに入って坐る。
アラビカトラジャコーヒーを注文する。 「ウエルカム、 日本人か」
不審尋問には答えないで、顎をしゃくれば木の実楽士がポロンポロンとマナド民謡。
楽隊つきのカンコー旅行なんて、特選ツアーでもこんな贅沢はないだろう。

椰子林のなか、うねるように丘を越えて県境ポイガルを通過する頃には、教会とモスジュット(イスラム礼拝場)が混合して、西に行くほどイスラムが強くなるが、何処ぞの国のような血で血を洗う宗教戦争など起らない。
主義主張を譲らない契約民族と受容と寛容の民族の違いか、単に適当な信仰なのか私には分からないが、地を覆って進軍したキリスト教が、インドネシアではイスラムの海に浮かぶ藻くずのような点でしか広まらないのは何故なのか。
ミナハサクリスチャンもイスラムに囲まれた島のように浮かんでいる。
女がジルバブで顔を被いアザンの斉唱が流れると、キリシタンとイスラムの区別もつかない私でも、遥けく来たものよとの感慨が湧く。
楡の木陰にチャペルの鐘の音、えせクリスチャン西洋思想に犯された情けない教育のせいか。

ミナハサをあとにボランモゴンドウにはいるに従い、すれ違う車もなく宗旨に関係なく、石油文明の恩恵が薄れ、電信柱のない世界が広がる。
水道はおろか電気もない自然との共存も悪くはないが、自然は万物に平等だから、毒蛇にもマラリアにも恵みを垂れ給う。
二百㌔走り間道に入り、山の麓を廻ると、突然視界が広がった入り江が、ラブアン・ウキ、ウキの舟泊まりだった。
私は大袈裟でなく息が止まった。
嗚呼、此処こそ伝説の浦島が、救けた亀に連れられて訪れたイスタナ・ドウユン(龍宮城)への入り口ではないか。
母なる神秘的な、安らぎの胎内のような水面が丘の奥深く導かれ、物音ひとつしない静寂を怖れる衝動で小石を投げれば、油のような水面の彼方まで波紋が広がってゆく。
足元で浮き州が動くように無数の蟹が蠢いていた。
眼をやれば左右から迫った丘が海に沈む先に小島が浮かび、白い波涛が横一線に背景を作っていた。 「プラウ・プニュウ(亀島)です」
静寂を破ったのは長いウエーキを引いて、現世の規則正しい船外機の破裂音を恥ずかしげに響かせたアウトリガーカヌーだった。
「迎えの仲間です。ロスメン(旅篭)もないので、今日は対岸の家に泊まりましょう」
腰の幅しかない丸木舟に腰掛けて風が頬に心地良い。
薄暮の鏡の水面を分けると、俺は浦島太郎になったと本気で思った。
突然いっせいに小波がたち、小魚の大群が舟を包むが、仲間達は一顧も与えない。
欲しければ欲しいだけの恵みのある豊かな国なのだ。
漁どりを終えた数隻のカヌーが、海風をラテンセイルに孕ませてすれ違う。
冷えたビールは望めないが、ジャルパックでは買えないカンコーだ。 しかも楽隊付き。
さざ波と刻む発動機音、 兄ちゃんの爪弾きが夕闇に見事なハーモニイを流す。

SI PATOKAAN　パトカアンちゃん

Sayang sayang si Patokaan matigo-tigo gorokan sayang,
Sako mange waki tanah jauh mailek ilek lek lako sayang,
パトカアン君、 遠くに行くのはつらいよね、
別れにひと目会いたくても、親戚中が集まってて、恥ずかしくて、、
テンポの速い快調なメロデイ。

AMPURUK　峠の頂きにて

Ampuruk ing kuntung parege-regesan　Maka tembo-tembo mai inataran
Kasaleen kaaruyen mai inataran　Tumembo mei ing kayobaan
Kami mangaleiye kariya katuari　Secita mbayaan ndoang tayasa
Maesa wona tewo membembereran　Eluran kayobaan yasa
峠の頂きに立って、去り行く故郷、これからの新世界を想う。
恋人よ、心変わりしないで待っていて、、。
気ずかれないようにレコーダーのスイッチをオンにした。

暮れなずむ岸辺からピカリと光が場所を教える。引き潮に足を濡らして上陸した。
センテル(懐中電灯)の光束の先に小屋があり、夕餉の匂いも流れていた。
案内された家は板壁の隙間から風も流れるあばら屋だったが、ベッドのシーツは取り替えられているのがわかった。
ペトロマックス(加圧ランプ)の灯かりと陰が踊り、尻のスケットルを取り出して気付け薬バーボンを喉に流す。
「魚好きのトアンにウダンロブスタ（海老）と考えたのですが、ちょうど罠に掛かった奴がいたんで、それにしました」
こげ茶色のそれが皿にいた。 「野豚かね？」
「猪でなくて牛みたいなやつで」 「まさか、アノアでは？」
「むこうから嵌まってきたので、、猪専用って札もたてられませんしね」
笑い事ではない。国際重要保護獣アノアが俺の口のなかにいる。
世界でこの島にしか生息しない犬程の牛の元種、アノア貴重種だ。
靴底よりは軟らかい、噛むといい味がした。
「君はモロシンやマエラン村より此処がいいのかね」 主人に聞いた。
「わたしゃ余所者ですけん。ジャパラ(中部ジャワ彫刻村)から黒檀や鉄木、白檀など捜して旅して此処でこいつと知り合ってね、、」
ベッドに横になって蝋燭を消すと、森の生き物は活発になる。
鹿の鳴き声、なにかの鼻息や足音が、頼りない板壁の向こう側で聞こえた。天然記念物が遊んでいるのだろう。

朝の光が主人の財産を照らし出した。小屋のまわりに所狭しと立てかけられた材はヨット乗り垂涎のチーク、マホガニイ、ジャパラの腕が無造作に作品を生み出していた。
こんな異境に暮らしても、創作はせずジャワ様を踏襲している。
手離れが早いといわれるインドネシア職人だがこれはどうだ。ラマヤナ物語が一枚板に三層に彫られている。二層目はどうやって刃を入れるのだろう。
お粥の味に社会学を持ち出したくなる今朝のお粥味は絶品だった。
アノアの出汁ではないだろうが、色の黒いでかい尻を腰巻きで包んで、薪の煙りで眼をこすっていた夫人が炊いたとは信じられない。
ジャパラの彫り師も“こいつがいたので”、か。味だけは食べてみるまでわからない芸術だ。

汽車賃払ってでももう一度招待されたい。アノア・ステーキ付と宣伝したら銃殺になるが。
コップに並々と注がれたコーヒーにザラメ糖、コンデンスミルクまで。
この国の仕来たりで、熱いコーヒーを受け皿に受けてゆっくりいただく。
アラビカの馥郁たるアロマ。トラジャの地にも近い。ネスカッフェの下僕に成り下がったヒルトンの金持ち野郎ざまあみろ。

西の第二の町のゴロンタロ行きを止めたのは、アノアを食ったせいでもマラリアが怖いせいでもなく、ワテイのドライビングテクニックだとエボラ熱になりそうだから。
彼のせいではなくハイウエイとゆう名前がそうさせる。無人の道をクラクソンを鳴らしっぱなしで突っ走るが、山羊との約束はないから一頭を巻き込んで、車は危なく崖に転落するところだったが、山羊はすぐ立ち上がって消えたのが砂煙の後ろに見えた。 冷や汗をぬぐって見るとメーターはまだ時速１００キロを指して止まっているのにエンジンはショックかスタートしなかった。モウアト湖の腿程もある鰻に食欲もなく、トンパソバルー、モトリンと下ってアムランの海を見た。
「疲れたでしょうから温泉でもどうですか。日本人は熱い湯に入る珍しい人間だから」
ここだとゆうモイントとゆう海岸には、黒い砂浜に波が寄せていた。
ぴちゃぴちゃ渚を歩いてから、掘ってみると熱い。横になれるだけの穴はもう湯舟で、大空と水平線、遠巻きにする仲間を眺めながら大の字になって、差し出されたお湯のような缶ビールを飲んだ。
こんなのがあればいいなと思うと、神様はもうそこに準備するといった感じだ。
夢の入り江、神秘の湖、森と火山、島々。デユーテイフリーショップはまだないが、薄物を纏った天女を探して、椰子の梢を眺めながら、もういちどお湯になったビールをあおった。

プライベートビーチの金網の隣のマララヤンビーチはサタデイイブニング、賑やかだった。
誰もいないＶＩＰ専用ベンチのランプが、庶民の砂浜の格好の灯かりになっている。
文明の冷えたビールを飲み直し、文化的美人(トンスエ人としておく)が、片方の腰に体重を移してゆったりと唄いだした。
私はこの柔らかいマナドを感じさせるメロデイにかアルコールにか酔った。ここの言葉はすべてに韻をふんでいるから耳にも心にも沁み込むのかもしれない。その極め付きが、

LURI WISA KO　(Where is my Doll)

Luri wisa ko luri wo dumedenme　　Luri kayu jati luri rerendeman
Diwaganku un rende,rendemku wiani ko　　Maesa 'm banua kita dua e lenso
Maerenderendemen kita dua lenso　　Lenso mu man putih, taan si nujian

耳元で囁かれたらいちころと思いきや、歌姫は気だるいような仕草で隣に坐って、私程度のエイゴで身元調査を開始した。
「ジャパンか。どこから来たか。ホテルはどこで、いつ帰る？」
赤シャツの身内か親がポリスか。これが彼女の売り物の長い髪に絶え間なく指を絡ませる。
それが粋なのか流行なのか、恥ずかしい歳でもなさそうで、これで三十年生きてきた。
がんばれ、ケケ(娘さん)。

日曜日の朝、白く輝くチャペルに善男善女が群れ集い、鐘の音が響くコロニアルシテイ・マナド。サンデーミサのあと、聖歌隊の演奏を鑑賞しましょうと正真正銘トンスエ美人リッチェのお招きがあった。 特別にホーリーソングをコリンタンで演奏してくれるそうだ。

コリンタンは竹製のシロホンで、知っていたし街で買ったエルニイのテープもこの伴奏だった。まぎれもなく女性的な音で好感がもてるが、ややパンチに欠ける。
竹で造った楽器は笛をはじめジャワのアンクルン(めいめいがひとつの音階を担当して大勢で演奏する。 ヨーロッパにもカウベルなどがある)、ヴェトナムで聴いた吊り橋のように巨大な木琴には及ばないが、これらも大昔先進国中国大陸から海を渉って教えられたのだろうか。

物造り職人大国日本は、同じ竹笛でも完璧を追求して銘を刻み生命を吹き込む。
殺人兵器日本刀まで工芸品にまで高める。 ここは違う。音さえでればいいのだ。 物に対する感覚が違う。近代工業社会もこんな些細な神経で支えられていはいないか。

ひつこさとか執着心からも、インドネシア工業立国の道は遥かに遠い。
イッチェはまことに丁寧な解説を加えて説明してくれる。 歌は感性だからほんとうは説明は不要だとも言えないで拝聴する。
「インドネシア合唱コンクールで優勝しました」 「このグループが?」
「いや、 サンギールクリスチャンの Masamper Tampungang Lawo Group ですが」

彼女の至れり尽くせりサービスは、私の手にその栄光あるカセットをそっと手渡して、トウキョーに紹介してくださいと付け加えるのを忘れなかった。 自信は全くないが努力しましょうと応えた。
どうせなら、絶海の過疎島サンギール・タラウドの芸術家を呼べるなら心からそう願う。

日本人がそう呼ぶメナドを、ムナドかマナドと発音できた時が俺のマナドになるだろう。
空港に向かう道から赤い装束に身を固めた多数の若者が湧いて出てきた。
「VIPでも来るのでしょう。チャカ・レレウオーダンスって戦いの踊りです」
大勢の群集で走れないので一緒に見物する。
どこから持ち出したのか、先頭隊はイベリア人の兜を被り、腰に太鼓をぶらさげてリズミカルに打ち鳴らす。 まさしく龍騎兵、中世鼓笛隊の行進だ。
続く喇叭隊に手を振ると、歓迎の予行演習か、親分が合図すると高らかにラッパが鳴った。

インドネシアで聞く初めてのトランペットだった。なんとそれはメキシコマリアッチ風のスパニッシュリズムではないか。
この好色強欲なイスパニア植民集団が北のフィリピンからなだれ込むのを阻止せんと、オランダに助けを求めたのが事の始まりで、征服された住民が喜ぶような植民の成功だったが、当のミナハサ人が忘れ果てたイスパニアの陰が、こうして芸能に残っている。
私の驚きを背にして、赤衣の集団は、ラッパの音も高らかに遠ざかっていった。

私はマナド、メナド、ムナドとロずさみながら、お兄ちゃんから木の実ウクレレを受け取り、今度会う時は本物のギターだよと肩をたたき、アリイに再会を約してタラップに歩いた。

人間のほか渡れなかった、渡りたくなかったウオーレスラインを十分もかからずひと跨ぎして、茶色のジャワの岸辺が、雨を呼ぶ雲間に見え隠れしていた。
たぶん蒼い国から来る人に、恥ずかしがって雲で隠しているようにみえた。

友に会ったら言ってやろう。
「マナドに行かれたことはありますか。まだなら行くべきです。インドネシアの茶色のイメージが蒼色に変わるでしょうから」

箱庭の街マナド紀行より

インガ...インガ...

川井 友佳子

『Inga...Inga...,Mari Badaftar Rame-Rame』
（忘れないでね。皆で一緒に登録に行きましょう。）
1999年3月14日から、毎日、ＳＣＴＶ及びＲＣＴＩで繰り返し放映されていた、総選挙の登録を促すこのコマーシャルを覚えている人も多いことだろう。
巨大な顔と豪快な笑顔、そして最後のウインクのスペクタクル光線。彼女の映像は、全国の視聴者に強烈な衝撃を与えた。そして彼女は一躍時の人となった。

マナド語の『インガ』は、インドネシア語の『インガット』のこと。英語の『リメンバー』の意味である。この《インガ！インガ！》は大流行語となり、バラェティ番組や他のコマーシャルでも頻繁に使われるようになった。
《レフォルマシ》を昨年の流行語大賞とするならば、この《インガ！インガ！》は間違いなく１９９９年度の流行語大賞となるだろう。

彼女の名は、フリダ・ピトイ（Frida Pitoy）。1956年２月16日マナド生まれの43歳。身長155 cm、体重55kg。16年間専業主婦である彼女は、つい半年前までは極普通の主婦であった。
彼女は、若手デザイナー、Drs.Chok Tellow が経営するマナド市パアル・ドゥアにある美容院『トレンデイ・スタジオ』で働いて生計を立てていた。

このコマーシャル撮影のためマナドを訪れていたガリン・ヌグロホ(Garin Nugroho) 監督は、知人のDrs.Chok Tellow に依頼して出演候補者を探していた。
フリダは、候補者のテストをしているヌグロホ監督のもとに、モデルをしている息子のファドリ・ピトイを推薦しに行った。ところが、監督の目に留まったものは、息子ではなく、母親のフリダの方であった。フリダは数多いる美人のモデルたちを押し退け、見事出演者に選ばれたのである。彼女を選んだヌグロホ監督こそ当代の名伯楽というべきであろう。

撮影は、Wori郡のWori村、Nain村、Matehagi村の３ヵ所で行なわれた。（サンティカ・ビーチ・ホテル がある地区）
素人のフリダは、ＮＧを繰り返し、百回近く取り直しをした。
このコマーシャルの放映後、彼女は一躍マナドの有名人となった。
市場へ行くと、人々に取り囲まれ、サインを求められたり、記念写真を撮られたりするようになった。

選挙登録期間終了後と同時に放映は終わったが、彼女が出ている新しいコマーシャルは既に放映中である。
彼女のもとには映画やバラェティ番組出演の話が多数ある。今後、タレントとして大活躍することだろう。

Berkat iklan layanan masyarakat, Frida Pitoy sekarang jadi populer bak pemain film

北スラウェシ日本人会　　**会員の入退会のお知らせ**

入会：	外岡　蒋(あきら)	PT.DEHO CANNING	TEL:	(0438)21390
	芝山　江美子	ＪＩＣＡ	自宅 TEL:	(0431)854530
	野田　奈緒子	ＪＩＣＡ	自宅 TEL:	(0431)844289
退会：	牛崎　英次郎	ＰＣＩ	任期満了、日本に帰国。	
	辻広　角栄	飛島建設	任期満了、日本に帰国。	
	佐藤　南雄	飛島建設	任期満了、日本に帰国。	
	大野　幸生	飛島建設	任期満了、日本に帰国。	
	金谷　俊緒	飛島建設	任期満了、日本に帰国。	

― 編集後記 ―

半年前から計画していた『戦争特集』を、前５号でようやく発行することができました。公約を果たすことができ、ほっとしています。
皆様方のご感想を編集部までお寄せ下さい。

本号では、北スラウェシ在住の方にもあまり知られていない、ゴロンタロを特集しました。片道１０時間という遠距離にあり、マナドやビトゥンで勤務している方にはなかなか足を伸ばす余裕がないかもしれませんが、機会があれば、この北スラウェシ第２の都市に一度は行かれることをお勧め致します。
その時、この特集が少しでもお役に立てば幸いです。

４月に入会したばかりの芝山さん、野田さんは、赴任直後のご多忙中にもかかわらず、編集部からの原稿要請を快く引き受けてくれました。
本文にもあるように、現在はマナド、ミナハサ中心に活動中ですが、今後は、ボラアン・モンゴンドウ県、ゴロンタロ県、サンギエ・タラウド県に活動の拠点を移すと伺っています。今後ご両名から、知られざる北スラウェシの地方の様子などを綴って頂ければ、と思っております。

今回は、出張や休暇などで日本に帰国されている方が多く、会員からの原稿が少なく、外部からの寄稿が多くなりました。
常連の松井和久氏、庵波人氏などの原稿を掲載させて頂きました。
長崎さんの大作、『インドネシアのまぐろ延縄漁業』は、前号と同様にご本人が執筆されたものを編集部でタイプしたものです。次号で完結する予定です。

早いもので、日本人会が発足して満一年が経過いたしました。そのため、次号第７号では、北スラウェシ日本人会設立１周年記念号とする予定です。
会長挨拶、理事からの活動報告、会計報告、安全対策連絡協議会報告などを、掲載する予定です。第７号は１９９９年８月下旬頃発行を計画しています。
原稿は７月下旬頃迄に編集部にご提出下さい。

１９９９年７月１日

日本人会会報編集部　編集部長：川口博康
編集部員：川井雄二